

# 星女郎

泉鏡花

青空文庫



俱利伽羅峠には、新道と故道とある。いわゆる一騎落から礪となみ  
 波山やまへ続く古戦場は、その故道で。これは大分前から特別好もの  
 物ずきな旅客か、山伏、行者の類たぐいのほか、余り通らなかつた。――  
 とところで、今度境三造の過よぎつたのは、新道……天田越あまだごえと言う。  
 絶頂だけ徒歩すれば、俣くるまで越された、それも一昔。汽車が通じて  
 からざつと十年になるから、この天田越が、今は既に随分、好ものず  
 事き。

さて目的は別になかつた。

暑中休暇に、どこかその辺あたりを歩行あるいて見よう。以前幾たびか上  
下したが、その後は多年ふもと麓も見舞わぬ、俱利伽羅峠を、というに  
過ぎぬ。

けれども徒勞でないのは、境の家は、今こそ東京にあるが、も  
と富山県に、父が、某なにがしの職を奉じた頃、金沢の高等学校に寄宿し  
ていた。従つて暑さ寒さのよりよりごとに、度々俱利伽羅を越え  
たので、この時志したのは、謂いわば第二の故郷に帰省する意味に  
もなる。

汽車は津幡つばたで下りた。市との間に、もう一つ、森もりもと下と云う町  
があつて、そこへも停ステエシヨン車場が出来るそうな、が、まだその運び  
に到らぬから、津幡は金沢から富山の方へ最初の駅。

間四里、聞えた加賀の松並木の、西東あつちこち、津幡までは  
 ほとんど家続きで、蓮根れんこんが名産の、蓮田はすだが稲田より風薫る。で、  
 さまで旅らしい趣はないが、この駅を越すと竹の橋——源平盛衰  
 記に——源氏の一手は樋口兼光ひぐちかねみつ大将にて、笠野富田を打廻り、  
 竹の橋の搦手からめてにこそ向いけれ——とある、ちようど峠の真下の  
 里で。俱利伽羅を仰ぐと早や、名だたる古戦場の面影が眉に迫つ  
 て、驚破すわ、松風も鯨波とぎの声、山の緑も草摺くさずりを揺り揃えたる数万  
 の軍兵ぐんびよう。伏屋ふせやが門かどの卯の花も、幽霊ようれいの鎧よろいらしく、背戸の井戸  
 の山吹も、美女たおやめの名の可懐なつかしい。

これは旧もととても異かわりはなかつた。しかしその頃は、走らす車、  
 運ぶ草鞋わらじ、いざ峠にかかる一息つくため、ここに麓路ふもとじを挟さんで、

竹の橋の出入ではずれに、四五軒の茶店があつて、どこも異らぬ茶染ちやぞめ、  
藍染あいぞめ、講中手拭こうじゆうてぬぐいの軒にひらひらとある蔭から、東海道の宿  
々のように、きちんと呼吸いきは合わぬながら、田舎は田舎だけに声こ  
わづくろ

繕いして、

「お掛けやす。」

「お休みやす。」

それ、馬のすずに調子を合わせる。中には若い媚なまめかしい声が  
交つて、化粧した婦おんなも居た。

境も、往ゆき還かえり奥の見晴しに通つて、縁から峠に手を翳かぎす、馴な  
染しみの茶店があつたのであるが、この度見ると、可なり広いその家や  
構がまえの跡は、草茫ぼうぼう々、山を見通しの、ずツと裏の小高い丘には、

松が一本、野を守る姿に立って、小さな墓の累かさなったのが望まれる。

由緒ある塚か、知らず、そこを旅人の目から包んでいた一ひと叢むらの樹立こたちも、大方切払われたのであろう、どこか、あからさまに里が浅くなつて、われ一人、草ばかり茂つた上に、影の濃いのも物寂しい。

それに、藁屋わらやや垣根の多くが取払われたせいか、峠の裾すそが、ずらりと引いて、風にひだ打つ道の高低たかひく、畝うねうね々と畝つた処が、心覚えより早や目前めさきに近い。

が、そこまでは並木の下を、例に因つて、睨なわての松が高く、蔭が出来て涼すずしいから、洋傘こうもりを畳んで支ついて、立場たてばの方を振返ると、農家は、さすがに有りのままで、遠い青田に、俯向うつむいた菅笠すげがさも

ちらほらあるが、藁葺わらぶきの色とともに、笠も日向ひなたに乾からびている。  
境は急に心細いようになった。前さきにも後うしろにも、往來ゆききの人はなかつたのである。

偶ふと思出したことがあつて、三造は並木の梢こずえ——松の裏を高く仰いで見た。鵲かささぎの尾の、しだり尾の靡なびきはせずや。……

## 二

いんぬるとし  
往年いんぬるとし、雨上りの朝、ちようどこの辺あたりを通掛とおりかかつた時、松の雫しずくに濡色見せた、紺こんじよう青の尾を豊ゆたかに、樹この間の蒼空あおぞらを潜くぐり、鵲かささぎが急かきぎもせず、翼まっしろで真白な雲を泳いで、すいと伸のし、



すいと伸して、並木の梢こずえを道づれになつた。可懐なつかしいその姿を見るのも、またこの旅の一興かぞに算えたのであつたから——それを思出して窺うかがつたが……今日は見えぬ。

なお前途ゆくての空を視ながめ視め、かかる日の高い松の上に、蟬の聲の喧かまびすしい中にも、嘯ねぐらしてその鵲ねぐらが居はせぬかと、仰いで幹をたたきなどして、右瞻とみこ左瞻うみながら、うかうかと並木を辿たどる——大な蜻蛉おおきとんぼの、跟あとをつけて行くゆくのも知らずに。

やがて樹立まばが疎まばらになつて、右左両方へ梢ひらが展くと、山の根が迫つて来た。俱利伽羅のその風情は、偉大なる雲の峯が裾を拡げたようである。

処へ、横雲ただよの漾さまう状で、一叢ひとむらの森の、低く目前めさきに顕あらわれたの

は、三四軒の埴生はにゆうの小屋で。路傍みちばたに沿うて、枝の間に梟ふくろうの巢のごとく並んだが、どこに礎いしずえを据えたとしてもなく、元村から溢あふれて出たか、崖から墜おちて来たか、未来も、過去も、世はただ仮の宿と断念あきらめたらしい百姓家——その昔、大名の行列は拝んだかわりに、汽車の煙には吃驚びつくりしそうな人々が住んでいよう。

朝夕の糧を兼ねた生垣の、人丈に近い茗荷みょうがの葉に、野茨のぼらが白くちらちら交つて、犬が前脚で届きそうな屋根の下には、羽目へ掛けて小枝も払わぬ青葉枯葉、松薪まきをひしと積んだは、今から冬の用意をした、雪の山家と頷うなずかれて、見るからに佻わびしい戸の、その蜘蛛くもの巢は、山姥やまうばの髪のみだれなり。

一軒二軒……三軒目の、同じような茗荷の垣の前を通ると、小

家は引込んで、前が背戸の、早や爪尖あがりになる山路との  
 劃目に、桃の樹が一株あり、葉蔭に真黒なものが、牛の背中。

この畜生、仔細は無いが、思いがけない、物珍らしさ。そのず  
 んど切な、たらたらと濡れた鼻頭に、まざまざと目を留めると、  
 あの、前世を語りそうな、意味ありげな目で、熟と見据えて、む  
 ぐむぐと口を動かしざまに、ぺろりと横なめをした舌が円い。

その舌の尖を摺って、野茨の花がこぼれたように、真白な蝶  
 が翩然と飛んだ。が、角にも留まらず、直ぐに消えると、ぱつと  
 地の底へ潜った状に、大牛がフイと失せた。……

失せた……と思う暇もなしに、忽然として消えたのである。

「や！」

声を出して、三造はきよとんとして、何かに取摑とつつかまつたらしく、堅くなつてそこらを捻向ねじむく……と、峠とも山とも知れず、ただ樹の上に樹が累かさなり、中空を蔽おほうて四方から押被おつかぶさつて聳そびえ立つ——その向つて行くべき、きざきざの緑の端に、のこのこと天窓あたまを出した雲の峯の尖端とつばしが、あたかも空へ飛んで、幻にぼちぼち残つた。牛頭に肖にたとは愚か。

三造は悚然ぞつとした。

が、遁にげ戻るでもなし、進むでもなく、無意識に一足出ると、何、何、何の事もない、牛は依然としてのつそりと居る。

一体、樹の間から湧わいて出たような例の姿を、通りがかりに見し、瞻みまもり瞻みまもり、つい一足歩ある行いた、……その機はずみ会みに、件くだんの桃の

木に隠れたので、今でも真正面へちよつと戻れば、  
にまた消え失せよう。  
立ちどころ 処

蝶も牛の背を越したかな……左の胴腹に、ひらひらひら。

「はは、はは。」

独りで笑出した。

「まず昼間で可かつた。夜中にこれを見せられると、申分なく目をまわす。」

三

これより前、境はふと、ものの頭を葉越に見た時、形から、名

から、牛の首……と胸に浮ぶと、この栗殻くりからとは方角の反対な、  
 加賀と越前えちぜんの国境くにざかいに、同じ名の牛首がある——その山も二  
 三度越えたが、土地に古代の佛おもかげあり。麓ふもとの里に、鋳頭しころずき巾を取つ  
 て被かぎ、薙刀なぎなた小脇こわきに搔か込んだ、面つらには丹にを塗り、眼まなこは黄金こがね、髯ひげ  
 白銀しろがねの、六尺有余の大彫像、熊坂くまさかち長範ちやうはんを安置して、観音かんのん  
 扉びらきを八文字に、格子はも嵌はめぬ祠ほこらがある。ために字あざなを熊坂とて、  
 俗に長範の産地となと称える、巨盗の出処は面白い。祠たてばは立場たてばに遠い  
 から、路端みちばたの清水の奥に、蒼あおく蔭り、朱に輝く、活いけるがごと  
 き大盗賊の風采ふうさいを、車の上からがたがたと、横ながに視めて通つた  
 事ことこそ。われ御曹子おんぞうしならねども、この夏休みには牛首かちあるを徒  
 歩きして、菅笠すげがさを敷いて対面しよう、とも考えたが、ああ、し

ばらく、この栗殻の峠には、謂われぬ可懐い思出があつたの  
 で、越中境へ足を向けた。――

処を、牛の首に出会つたために、むしろその方が興味があつた  
 かも知れないと、そぞろに心の迷つた端を、隱身寂滅、地獄  
 が消えた牛妖ぎゆうように、少なからず驚かされた。

正体が知れてからも、出遊の地に一一心ふたごころを持つて、山霊ないがしろを蔑  
 にした罪を、慇懃いんぎんにこの神聖なる古戦場むかに對つて、人知れず慚  
 謝んしゃしたのである。

立向う山の茂しげりから、額を出して、ト差覗さしのぞく状さまなる雲の峰の、  
 いかにその裾すその広く且つ大なるべきかを想うにつけて、全体を鵜う  
 呑のみにしている谷の深さ、山の高さが推量おしはかられる。

迎<sup>たど</sup>るほどに、洋傘<sup>こうもり</sup>さした蟻<sup>あり</sup>のよう——蟬<sup>せみ</sup>の聲<sup>こゑ</sup>が四辺<sup>あたり</sup>に途絶<sup>とつ</sup>え  
 て、何<sup>なに</sup>の鳥<sup>とり</sup>かカラカラと啼<sup>な</sup>くのを聞<sup>き</sup>くと、ちよつとその嘴<sup>くちばし</sup>にも、  
 人間<sup>にんげん</sup>は胴<sup>どうなか</sup>中<sup>なか</sup>を横<sup>よこぐわ</sup>脚<sup>あし</sup>えにされそうであつた。

谷<sup>や</sup>が分<sup>わ</sup>れて、森<sup>もり</sup>が涼<sup>すず</sup>しい。

右<sup>みぎ</sup>手の谷<sup>や</sup>の片隅<sup>かたぐし</sup>に、前<sup>まへ</sup>に見<sup>み</sup>た牛<sup>うし</sup>の小家<sup>こや</sup>が、小<sup>こ</sup>さくなつて、樹<sup>こだち</sup>立<sup>たち</sup>  
 ありとも言<sup>い</sup>わず、真<sup>ま</sup>白<sup>しろ</sup>に日<sup>ひ</sup>が当<sup>あ</sup>る。

やがて、二分<sup>ふぶ</sup>が処<sup>のほ</sup>上<sup>あ</sup>つた。

坂路<sup>さかみち</sup>に……草刈<sup>くさき</sup>か、鎌<sup>かま</sup>は持<sup>も</sup>たず。自然<sup>じねん</sup>薯<sup>じよ</sup>穿<sup>ほり</sup>か、鋏<sup>くわ</sup>も提<sup>た</sup>げず。  
 地柄<sup>じがら</sup>縞<sup>しま</sup>柄<sup>がら</sup>は分<sup>わ</sup>らぬが、いづれも手織<sup>て</sup>らしい单放<sup>ひとえ</sup>を裙短<sup>すそじか</sup>に、草履<sup>ぞうり</sup>  
 穿<sup>は</sup>き、日<sup>ひ</sup>に背<sup>そむ</sup>いたのは緩<sup>ゆる</sup>かに腰<sup>こし</sup>に手<sup>て</sup>を組<sup>く</sup>み、日<sup>ひ</sup>に向<sup>むか</sup>つたのは額<sup>かぶ</sup>に  
 手笠<sup>てがし</sup>で、对<sup>さしむか</sup>向<sup>むか</sup>つて二人<sup>ふたり</sup>——年<sup>とし</sup>紀<sup>き</sup>も同<sup>おな</sup>じ程<sup>ほど</sup>な六十<sup>むそじ</sup>左<sup>そ</sup>右<sup>こ</sup>の婆<sup>ば</sup>々<sup>ば</sup>が、



暢のんき気らしく、我が背戸に出たような顔かおつき色して立っていた。

山さんけい逕ぎようかくの礮ぎようかく、以前こそあれ、人通りのない坂は寸裂ずたずた、

裂目に草生い、割目に薄すすきの丈伸びたれば、蛇へびの衣きぬを避けて行く足あ

許しもとは狭まって、その二人の傍わきを通る……肩は、一人と擦れ擦れ  
 になつたのである。

ト境の方に立つたのが、心持身体からだを開いて、頬ほおの皺しわを引伸ひんのばす  
 ような声を出した。

「この人はや。」

「おいの。」

と皺枯れた返事を一人が、その耳あたりの辺しらの白髪がが動く。

「どこの人すら。」

「さればいの。」

と聞いた時、境は早や二三間、前途へ出ていた。

で、別に振り返ろうともしなかつた——氣に留めるまでもない、居まわりには見掛けない旅の姿を怪しんで、咎めるともなく、声高に饒舌しやべつたらう、——それにつけても、余り往來ゆきぎのないのは知れた。

けれども、それからというものは、遠い樹立の蔭に、朦朧もうろうと立ったり、間近な崖へ影が射さしたり、背後うしろからざわざわと芒すすきを搔かきわ分ける音がしたり、どうやら、件くだんの二人の媪おうなが、附絡つきまとっているような思おもいがした。ざつと半日の余、他ほかに人らしいものの形を見なかつたために、何事もない一對の白髪首が、深く目に映つて消え

なかつた、とまらず見える。

四

ひぐらし  
 蝸が谷になつて、境は杉の梢を踏む。と峠は近い。立向う雲の  
 峰はすつくと胴を躪わして、灰色に大なる薄墨の斑を交え、動  
 かぬ稲妻を畝らした状は凄じい。が、山々の緑が迫つて、むくむ  
 くとある輪廓は、霄との劃を蒼く、どこともなく嵐気が迫つて、  
 幽な谷川の流の響きに、火の雲の炎の脈も、淡く紫に彩られる。  
 また振返つて見れば、山の裾と中空との間に挟まつて、宙に描  
 かれた遠里の果なる海の上に、落ち行く日の紅のかがみに映つ

て、そこに蟠わだかまつた雲の峰は、海月くらげが白く浮べる風情。蟻ならを列べた並木の筋に……蛙のごとき青田あおたの上に……かなたこなた同じ雲の峰四つ五つ、近いのは城の櫓やぐら、遠きは狼煙のろしの余波なごりに似て、ここに  
ある身は紙鳶たこに乗つて、雲の棧渡かけはしる心地す。

これから前さきは、坂が急に嶮けわしくなる。……以前車の通つた時も、  
空からでないと曳ひきあ上げられなかつた……雨降りには滝になろう、縦に  
葉やげん研形がたに崩くずれ込んで、人足の絶えた草は、横ざまに生え繁つて、  
真直まっすぐに杖つえついた洋傘こうもりと、路の勾配との間に、ほとんど余地の  
ないばかり、蔦つた蔓かずらも葉の裏を見上げるように這はい懸かかる。

それは可いい。

かほどの処よじを攀のぼ上るのに、あえて躊躇ちゆうちよ躊躇ちよするのではなかつ

だが、ふとここまで来て、出足を堰止められた仔細がある。

山の中の、かかる処に、流灌頂ではよもあるまい。路の

左右と真中へ、草の中に、三本の竹、荒縄を結渡したのが、

目の前を遮った、——麓のもの、何かの禁厭かとも思ったが、

紅紙をさした箸も無ければ、強飯を備えた盆も見えぬ。

「可訝いな。」

考えるまでもない、手取り早く有体に見れば、正にこれ、往

来止。

して見ると、先刻、路を塞いでゐんだ、媪の素振も、通りがか

りに小耳に挟んだ言の端にも、深い様子があるのかも知れぬ。：

：土地の神が立たせておく、門番かとも疑われる。

が、往来止だで済ましてはいられぬ。もしその意味に従えば、  
 ……一寸先へも出られぬのである。

もつとも時経たつたか、竹も古びて、縄も中なかだる弛みがして、草に  
 引摺ひきずる。跨またいで越すに、足を挙ぐるまでもなかつたけれども、路  
 に着けた封印は、そう無雑作には破れなかつた。

前あとさき後みまわをしながら、密そつとその縄を取つて曳ひくと、等なおよ閑ざりに土

の割目に刺したらしい、竹の根はぐらぐらとして、縄がずるずる  
 と手繰たぐられた。慌あわてて放して、後さかへ退ひつた。——一對ごうの媪ばあが、背う  
しろ後で見張るようにも思われたし、縄張の動く拍子に、矢がパツと  
 飛んで出そうにも感じたのである。

いや、名にし負う俱利伽羅で、天にも地にもただ一人、三造が

この挙動ふるまいは、われわれ人間としては尋常事ただごとではない。手に汗を握る一大事であつたが、山に取つては、蝗いなごが飛ぶほどでもなからう。

境は、今の騒ぎで、取落した洋傘こうもりの、寂しく打倒ぶつたおれた形さえ、まだしも娑婆しゃばの朋達ともたちのような頼母たのもしさに、附着くつついて腰を掛けた。

峰から落し、谷から推おして、夕暮が次第に迫つた。雲の峰は、  
一ひとはけ 刷刷ひとはけいて、薄黒く、坊主のように、ぬつと立つ。

日が蔭つて、草の青さの増すにつけ、汗ばんだ单衣ひとえの縞しまの、くつきりと鮮明あざやかになるのも心細い——山路に人の小ささよ。

蜻蛉とんぼでも来て留まれば、城の逆茂木さかもぎの威嚴そとを殺いで、抜いて取

つても棄すつべきが、寂じやく寞まくとして、三本竹、風も無ければ動きもせず。

ひぐらし  
蝸かたのこ声だがまする………

## 五

カラカラと飴こだまして、谷の樹立こだちを貫ぬき貫ぬき、空へ伝わって、ちよつと途絶えて、やがて峰かたの方でカラカラとまた声が響く。

と、蝸かたのこ声だばかりでなく、新あらたにす鐸ねの音が起つたのである。

ちりりんりと——しかり、鐸を鳴らす、と聞いただけで、夏の山には、行者の姿が想像されて、境は少からず頼母たのもしかつた。



峠には人が居る。

その実、山霊かなが奏かなでるので、次第々々に雲の底へ、高く消えて行く類ゆたぐいの、深秘な音楽ではあるまいか、と覺おぼつか束なさに耳を澄ますと、確たしかに、しかも、段々に峰から此方こなたに近くなる。

蝸かがそれに競わんとするごとく、また頻しきりに鳴き出す——足許あしもとの深い谷から、その銀しろがねの鈴かねを揺ゆりあ上げると、峠から黄金こがねの鐸たがねを振下ろして、どこで結ばるともなく、ちりりりゆきかと行交ゆきかうあたりは、目に見えぬ木この葉が舞い、霧が降る。

涼しさが身に染みて、鐸たがねか、声か、音か、蝸ひぐらしの、と聞き紛まがうまで恍惚うつつとりとなった。目前めのさきに、はたと落ちた雲のちぎれ、鼠色の五尺の霧、ひらひらと立って、袖擦れにはつと飛ぶ。

「わつ。」

と云つて、境は驚駭おどろきの声を揚げた。

遮る樹立の楯たてもあらず、霜夜に凍いてたものごとく、山路へぬつくと立留まつた、その一団の霧の中に、カラカラと鐸が鳴つたが、

「ほう——」

と梟ふくろのような声を発した。面赭つらあかぐろ黒く、牙きば白く、両の頬くろみに胡桃くるみを噛かみ破わり、眼まなこは大蛇おろちの穴のごとく、額の幅約一尺にして、眉まゆは榮螺さざえを並べたよう。耳まで裂けた大口を開あいて、上から境を睨ねめ着けたが、

「これは、」

と云う時、かつしと片腕、ひじ肱を曲げて、その蟹かにの甲羅こうらを面形めんがたに剥はいで取った。

四十余りの総そうがみ髪で、筋骨たたく逞ましい一漢子いっかんし、——またカラカラと鳴った——鐸の柄を片手に持換えながら、

「思いがけない処ところにござった。とんと心着きませんで、不調法。」  
と一いちゆう揖して、

「面です……はははは面でござる。」

と緒を手首に、可おそろし恐い顔は俯向うつむけに、ぶらりと膝に翻ひらつたが、鉄で铸おこたらしいその厳おごさ。逞おごましい漢おのこの手にもずしりとする。

「お驚きでございましたらうで、恐縮おそでございます。」

「はあ、」

と云うと、一ひとは刎ね刎ねたままで、弾ぜんまい機が切れたようにそこに突立つったつていた身みがまえ構が崩れて、境は草の上へ投なげ膝ひざで腰を落して、雲ひよりげたはが日和下駄穿ひよりげたはいた大山伏を、足の爪つまさき尖から見上げて黙る。

「別に、お怪我けがは？」

手を出して寄つて来たが、腰でも抱こう様子に見えた。

「怪我なんぞ。」

境は我ながら可笑おかしくなつて、

「生命いのちにも別条はありません。」

「重ちようじよう畳じようでござる。」

と云う、落着いて聞くと、声のやや掠かすれた人物。

「しかし大丈夫、立派な処を御目に懸けました。何ですか、貴下あなた」

は、これから、」

「さよう、竹の橋をさして下山いたすでございます、貴<sup>あなた</sup>辺はな。」  
 境は振向いて峠を仰いだ。目を突くばかりの坂の葎<sup>むぐら</sup>に、竹はす  
 つくと立つている。

## 六

「ええ、日脚は十分、これから峠をお越しになつても、夏の日  
 暮れますまい——が、その事でござる、……さよう、その儀に就  
 いて、」

境の前に蹲<sup>しゃが</sup>んだ時、山伏は行<sup>ぎ</sup>衣<sup>ようえ</sup>の胸<sup>うずたか</sup>に堆<sup>か</sup>い、鬼の面<sup>えりも</sup>が、襟

と許から片目で睨むのを推入れなどして、

「実は、貴辺あなたよりも私てまえがお恥かしい。臆おくびよう病から致いてかよう

なものを持出しましたで。

それと申すが、やはりこの往来止の縄張でございませぬがな。

ここばかりではのうて、峠を越しました向うの坂、石動いするぎから取とツつきのぼ附の上り口にも、ぴたりと封じ目の墨があるでござります。

仔細しさいあつて、私てまえは、この坂を貴辺あなた、真暗まつくら三宝さんぼう駆下りました

で、こちらのこの縄張は、今承りますまで目にも入らず、貴辺あなたが  
お在いでなさる姿さえ心着かなんだでござります。

が、あちらのは、風説うわさにも聞きますれば、私てまえも見ました、と申  
しますのが、そこからさまで隔てませぬ、石動の町をこの峠の方

へ、人里離れました処に、山籠りを致しております。」  
 不動堂の先達だと云う。それでその鐸も、雲のような行衣も解めた。

「御免下され、」

とここで、鐸を倒に腰にさして、袂から、ぐったりした、油臭い、吠の煙草入を出して、真鍮の煙管を、ト隔てなく口ごと持つて来て、蛇の幻のあらわれた、境の吸う巻莨で、吸附けながら、

「赫と氣ばかり上つて、ざつと一日、好きな煙草もよう喫みません。世に推事というは出来ぬもので、これがな、腹に底があつてした事じゃと、うむと堪えるでござりませうが、好事半分の生

まびようほう  
兵法、豪く汗を掻きました。」

「峠に何事があつたんですか。」

「されば。」

すばすばと二三服、さも旨うまそうに立続けに行者は、矢継早に乙おとやつがつが矢を番えて、

「——ございました。」

「どんな事ですか。」

少し急せきこ込んで聞きながら、境は楯たてに取つた上のぼりざか坂を見返つた。峠おおを蔽う雲の峰は落日の余光なごりに赤し。

行者の頬も夕焼けて、

「順に申さんと余り唐突でございますで——一体かようでござい



ます。

峠で力餅ちからもちを売りました、三四軒茶屋旅籠はたごのございました、

あの広場ひろツばな、……俗に猿ヶ馬場ばんば——以前のぼりくだり上さか下さかの旅人で昌り

ました時分には、何が故に、猿ヶ馬場だか、とんと人力車の置場

のようでござりましたに、御存じの汽車が、この裾すそを通るように

なりましてからは、富山の薬売、城端じょうはなのせり呉服も、碌ろくに越

さなくなりまして、年一年、その寂れ方というものは、……それ

こそまた、猿えてどもが寄合場よりあいばになつたでございます。

ところで、峠の茶屋連中、山家やまがものでも商人あきんどは利さとに敏い——

名物の力餅を乾餅かきもちにして貯たくわえても、活計くわしの立たぬ事に疾はやく心着

いて、どれも竹の橋の停車場前へ引越しまして、袖無しのちやん

ちやんこを、ゆき 袴の長い半纏はんてんに着換えたでござります。さて雪国の山家とて、はたらばかんじょう 桁梁 厳丈な本陣擬まがい、百年経たつて石にはなつても、滅多に朽ちる憂うれいはない。それだけにまた、盗賊の棲家すみかにでもなりはせぬか、と申します内に、一夏あるひ、一日晩方から、や、もう可おそろしくはあり羽蟻が飛んで、麓ふもと一円、目も開あきませぬ。これはならぬ、と言う、口へ入る、鼻へ飛込む。蚊帳を釣つても寢床の上をうようよと這はいまわ廻る——さ、その夜あけ方に、あれあれ峠を見され、羽蟻が黒雲のように真直まっすぐに、と押魂消おつたまげる内、焼けました。残ったのがたつた一軒。

いずれ、やまかせ 山持ぎのものか、乞食どもの疎そそろであらう。焼残つた一軒も、そのままにしておいては物騒じやに因つて、上段の床

の間へ御仏像でも据えたなら、かまえおおき構は大い。そのまま題にして、俱くりからりざんんしょううざんんじ  
 利伽羅山焼残寺が一院、北国ほつこく名代なだいの巡拝所——  
 と申す説もござりました。」

## 七

「ところが、買手が附いたのでござりましてな。随分広い、山ぐるみ地所附だと申す事で。」

行者がちよいと句切つたので、

「別荘にでもなりましたか。」

きせる煙管を揮ふつて、遮るごとく、

「いや、その儀なら仔細しせいはござらん、またどこの好事ものずきじやと申して、そんな峠へ別荘でもござりますまい。……まず理窟おは措いて、誰だか買主が分らぬでございます。第一その話がござつてから、二人や、三人、ぽつぽつ峠を越したのもございますが、一向に人の住んでいる様子は見えぬという事で。ただ稀代なのは、いつの間にやら雨で洗つたように、焼跡やけあとらしい灰もなし、焚もえさしの材木一本横よこたわつておらぬばかりか、大風で飛ばしたか、土どだい礎石いし一つ無い。すらりと飯櫃形いびつなりの猿ケ馬場ぼんばに、吹溜ふきたまつた落葉おちを敷いて、閑々と静まりかえつた、埋うもれ井戸には桔梗ききようが咲き、薄すすきに女郎花おみなえしが交つたは、薄彩色うすさいしきの褥しとねのようで、上座かみくらに猿丸太夫けんぞく、眷属けんぞくすらりと居流れ、連歌でもしそんな模様じや。……

(焼撃やきうちをしたのも九十九折つづらおりの猿が所為しわざよ、道理こそ、柿の樹と

栗の樹は焼かずに背戸へ残したわ。) ……などと申す。

山家徒やまがであいでござるに因つて、何か一軒家を買取つたも、古猿の

化けた奴やつむかし。古この猿ケ馬場には、渾名あだなを熊坂くまさかと言つた大猿があ

つて、通行の旅人を追剥おいはがし、石動いするぎの里へ出て、刀の鰐つばで小

豆餅もちを買つたとある、と雪の炬端ろばたで話が積つもる。

トそこら白いものばかりで、雪上ゆきじょうろう藤とうは白無垢しろむくじゃ……な

んぞと言う処そこから、袖裾そですそが出来たものと見えまして、近頃峠の

古屋には、世にも美しい婦おんなが住すまう。

人が通ると、猿ケ馬場に、むらむらと立つ、靄もや、霞、霧の中に、

御殿女中の装おんないした婦の姿がすつと立つ——

見たものは命がない。

さあ、その風説うわさが立ちますと、それからこつち両三年、悪いと言いうのを強こいて越して、麓ふもとへ下りて煩わづうのもあれば、中には全く死んだもござる。……」

「まつたく？」

とハタと巻まきたたばこたばこ 蓑すずを棄すてて、境みちは路ち傍ばたへ高く居直る。

行者は、掌てのひらで、鐸すずの蓋ふたして、腰を張つて、

「さればその儀で。——

隣村も山道半里、谷戸やと一里、いつの幾日いつかに誰たれが死んで、その葬と式しきに参まつたといいうでもござらぬ、が杜ほととぎす 鶉うずの一声で、あの山、その谷、それぞれに聞えまする。

地体、一軒家を買取った者というのも、猿じゃ、狐じゃ、と申す隙に、停車場前の、今、餅屋で聞くか、その筋へ出て尋ねれば、<sup>ひま</sup>皆目知れぬ事はござるまい。が、人間そこまではせぬもので、火元は分らず、火の粉ばかり、わツぱと申す。

さらぬだに往来の途絶えた峠、<sup>あやし</sup>怪い風説があるために、近来ほとんど人跡が絶果てました。

ところがな、ついこの頃、石動在の若者、村相撲の関を取る力自慢の強がり、田植が済んだ祝酒の上機嫌、<sup>あまあが</sup>雨霽りで元氣は<sup>よし</sup>可、女小児の手前もあつて、これ見よがしに腕を扼つて——己が<sup>おら</sup>一番見届ける、得物なんぞ、何、<sup>てづか</sup>手掴みだ、と大手を振つて出懸けたのが、山路へかかつて、八ツさがりに、<sup>わし</sup>私も御堂へ寄つた

でござります。

そこで、御神酒おみきを進ぜました。あびらうんけんそわかと唱えて、押頂おしいて飲んだですて……

(お気をつけられい。)

と申して石段を送つて出ますと、坂へ立身たつみあが上りに片足を踏伸たふしばいて、

(先達、訳あねえ。)

と向むこう願はちまき巻まきしたであります——はてさて、この気構えでは、

どうやら覚おぼつか束つかないおぼつかと存ぞんじながら、連つれにはぐれた小相撲こすもうという風

に、源氏車げんじぐるまの首くびぬき拔ぬき浴衣ゆいの諸肌脱もろはだぬぎ、素足すそに草鞋穿わらじばき、じんじん

端折はしよりで、てすけとくてく峠とげへ押上おしのぼる後姿うしろつきを、日脚ひあしなりに



遠く蔭るまで見送りしましたが、何が、あなた貴辺、」

「え、その男は？」

## 八

先達は渋面して、

「まず生命いのちに別条のないばかり、——日が暮れましたで、私御本てまえ堂へだけ燈明を点つけました。で、縁の端で……されば四日頃の月をこう、」

てびさし手廂して、

「森の間あいから視ながめていますと、けたたましい音を立てて、ぐるぐ

る舞いじや、二三度立樹たちきに打着ぶつかりながら、件くだんのその昼間の妖物ばけもの退治が、駆込んで参りました。

(お先達、水を一口、)

と云うと、のめずつて、低い縁へ、片肱かたひじかけたなり尻餅しりもちを支ついたが、……月明りで見るとはせいではござらん、顔の色、真蒼まつさおでな。

すぐに岩清水を月影に透かして、大茶碗おちawanに汲くんで進すすめた。

(明王のお水でござる……しつかりなされ。)

と申したが、こつちで口あてへ当あがってやらすには、震えて飲めな  
んだでござります。

やっと人心地こころもちになつた処で、本堂傍わきの休息所やすみどころへ連つ込みました。

処で様子を尋ねると、（そ、その森の中、垣根越、女の姿がち  
らちらする、わあ、追懸おっかけて来た、入つて来る……閉めて欲ほしい。）  
と云うで、ばたばた小窓など塞ふさぎ、赫かつと明あくとも参らんが、煤すすけ  
たなりに洋燈ランプも点つけたて。

少々落着いての話では——勢いきおいに任せて、峠をさして押上つた、  
途中別に仔細しさいはござらん。元来もともと、そこから引返そうというでは  
なく、猿ヶ馬場を、向うへ……

というのが、……こちらで、」

と煙管の尖さきで草を圧おさえ、

「峠越し竹の橋へ下りて、汽車で帰ろう了りようけん。筒。ただただ、山  
一つ越せば可いわ、で薄すすき、焼やけいし石、踏ふみだいに、……薄暮合うすくれあい——

猿ヶ馬場はがらんとして、中に、すつくりと一軒家が、何か大牛が蟠わだかまったような形。人が開けたとは受取れぬ、雨戸が横に一枚と、入口の大戸の半分ばかり開いた様子が、口をぱくりと……それ、遣やつた塩梅あんばい。根太ごと、がたがたと動出しもし兼ねんですて。

そいつを睨にらみつけて、右の向むこう顱はちまき卷、大肌脱で通りかかると、キチキチ、キチキチと草が鳴る……いや、何か鳴くですじゃ、：

…  
 蟋きりぎりす 蟀きりぎりす にしては声おおきが大いぞ——道理かな、鼪いたち、かの鼪な。

鼪おなじでござるが、仰あおむ向けに腹を出して、尻尾をぶるぶると遣つて、同一処おなじをごろごろ廻る。



てな、で、その筋を据すえ眼まなこで、続く方へ辿たどつて行くと……いや、  
解よめましたて。

右の一軒家の軒下に、こう崩れかかった区劃くぎりのいし石の上に、卜天  
を睨にらんだ、腹の上へ両方の眼まななかだかを凸こ、シャ！ と構えたのは臺ひきがえるで—  
—手ごろの沢庵たくあんおし圧おしぐらいあろうという曲くせもの者。

吐つく息あたかも虹にじのごとで、かつと鼈かたに吹掛ける。これとて  
も、蚊かや蟬ぶゆを吸うような事ではござらん、式かたのごとき大物をせ  
しめるで、垂たらたら々と汗を流す。濡色あおぎいろが蒼黄色あおぎいろに夕日に光る。

怪あやしさも、凄すげさもこれほどなら朝茶の子、こいつ見物みものと、裾すそを  
捲まくつて、蹲しゃがみ込んで、

(負けるな、ウシ、)

などと面白半分、鼬殿を煽<sup>あお</sup>つたが、もう弱ったか、キチキチという声も出ぬ。だんだんに、影が薄くなつたと申す事で。」

## 九

「その内に、同じく伸<sup>の</sup>つ、反<sup>そ</sup>つ、背中を橋に、草に頸<sup>ぼん</sup> 窪<sup>のくぼ</sup>を擦りつけながら、こう、じりりじりりと手繰<sup>たぐ</sup>られる体<sup>てい</sup>に引寄せられて、心持動いたげにございました。

発奮<sup>はっ</sup>んで、ずるずると来た奴<sup>やつ</sup>が、若<sup>わか</sup> 衆<sup>いしゆ</sup>の足許で、ころりと翻<sup>かえ</sup>ると、クシヤツと異変な声を出した。

こいつ嗅<sup>か</sup>がされては百年目、ひよいと立って退<sup>す</sup>つたげな、うむ

と呼吸を詰めていて、しばらくして、密と嗅ぐと、芬と——貴辺。

ここが可訝い。

何とも得知れぬ佳い薫が、露出の胸に冷りとする。や、これ

がために、若衆は清涼剤を飲んだように気が変つて、今まで傍目

も触らずにいました。墓の虹を外して、フト前途を見る、と何と、

一軒家の門を離れた、峠の絶頂、馬場の真中、背後へ海のよう

な蒼空を取廻して、天涯に衝立めいた医王山の巔を背負い、

颯と一幅、障子を立てた白い夕靄から半身を顕わして、錦の

帯は確に見た。……婦人が一人……御殿女中の風をして、」

——顔を合わせた。——

「御殿女中の?……」



と三造は聞返す。

「お聞きなされ、その若衆わかいしゅの話でござつて——ト見ると、唇がキラキラと玉虫色、……それが、ぼつちり燃えるように紅あかくなつたが、莞爾にっこりしたげな。

若衆は、一支えもせず、腰を抜いたが、手を支つく間もない、仰あ向けおのに引ひくりかえる。独りひつでに手足が動く、ばたばたはじまる。はッあア、鼬おんなじの形と同一じや。と胸を突くほど、足が窘すくむ、手が縮まる、五体を手毬てまりにかがられる……六万四千の毛穴から血さつが颯さつと霧くになつて、件くだんのその紅い唇を染めるらしい。草うなじに頸うなじを擦着け、擦着け、

(お助け下さい、お助け!) ……

と頭ずで尺取つて、じりじりと後あと退り、——どうやらちつと、緊めつけられた手足の筋の弛ゆるんだ処で、馬場の外れへ俵転がし、むつくりこと天窓あたまへ星を載のせて、山端やまばなへ突立つたつ、と目が眩くらんだか、日が暮れたか、四辺あたりは暗くなつて何も見えぬ。

で、見返りもせず、逆落し、旧もとの坂をどどとと驅下りる——いやもう途中、追々ものの色が分るにつけ、山やま茨いばらの白いもの女の顔に躪あらわれて、呼吸いきも吐つけずに遁にげた、——と申す。

若衆は話の中うちも、わなわなと齒の根が合わぬ。

(生血いきちを吸われた、お先達、ほう、腕が冷い、氷のようじゃ。)

と引被ひつかぶせてやりました夜具の襟から手を出して、情なさけなさそうに、銀の指環を視ながめる処が、とんと早や大病人だな。

お不動様の御像おすがたの前へ、かんかん燈明を点じまして、その夜よは一晚、私が附添てまえったほどでござります。

峠越し汽車に乗って帰ると云うたで、その夜は帰らないのを、村の者も、さまで案じずにいましたげな。午過ぎひるてから四五人連立つて様子を見に参ったのが、通りがかり、どやどや御堂みどうへ立寄りましたに因つて、豪傑はその連中に引渡して、事済んだでござります。

が、唯ただいま今もお尋ねの肝腎あやしのその怪い婦人が、姿すがた容かたち、これがそれ御殿女中と申す一件——振袖ふりそでか詰袖つめそでか、裙模様すそでも着てござったか、年とし紀しごろは、顔立は、髪は、島田とやらか、それとも片はずしというようなことかと、委くわしく聞いてみたでござい

ますが、当人その辺はまるで見境みさかいがございませぬ。

何でも御殿女中は御殿女中で、薄ら蒼あおいにどこか黄味がかつた処きもののある衣物で、美しゆう底光りがしたと申す。これはな、墓の色が目に映つて、それが幻に出たらしい。

して見ると、風説うわさを聞いて、風説の通り、御殿女中、と心得たので、その実確たしかにどんな姿だか分りませぬ。

さあ、是沙汰これざたは大業おおぎようで、……

(朝疾とう起きて空見れば、

口紅つけた上じようろう、藤ふじが、)

と村の小児こどもは峠ながを視める。津幡川つばたがわを漕こぐ船頭こは、(筭こうがいさした

黒髪が、空から水に映る)と申す、——峠なの婦人おんなは、里も村も、

ちらちらと遊ゆぎ行ようなさるる……」

## 十

「その替り村里から、この山へ登るものは、ばったり絶えたでありましてな。」

「それで、」

聞き惚きれていた三造は、ここではじめて口を入れたが、

「貴下あなたが、探險——山開きをなさいましたんですね。」

先達は額に手を当て、膨れた懐ふところ中を伏目に覗のぞいて、

「御意で、恐縮をいたします……さような行ぎ力りきがありますか

い。はッはッ、もつとも足は達者で、御覽の通り日和下駄ひよりげたじや、  
 こころは先達めきましたな。立山たてやま、御嶽おんたけ、修行にならば這摺はいず  
 つても登りますが、秘密の山を人助けに開こうなどはもつての  
 外の事でござる。

また早い話が、この峠を越さねばと申して、多勢たぜいのものが難渉  
 をするでもなし、で、聞いたままのお茶話。秋にでもなつて、朝  
 ぼらけの山の端はに、ふと朝顔でも見えましたら、さてこそさてこ  
 そ高峰たかねの花と、合点がってんすれば済みます事。  
 処を、年効としがいもない、密そつと……様子が見たい漫ろそぞ心で、我慢が  
 ならず企てました。

それにいたせ、飛んだ目には逢いとうござらん心得から、用心

のため  
の  
に  
思  
い  
つ  
き  
ま  
し  
た  
は  
こ  
の  
一  
物  
、  
な  
、  
御  
覧  
の  
通  
り  
、  
古  
く  
か  
ら  
御  
堂  
の  
額  
面  
に  
飾  
つ  
て  
ご  
ざ  
り  
ま  
す  
獅  
噛  
面  
、  
——  
待  
て  
待  
て  
対  
手  
は  
何  
にも  
せ  
よ  
、  
こ  
の  
方  
鬼  
の  
姿  
で  
参  
ら  
ば  
、  
五  
枚  
鍔  
を  
頂  
い  
た  
も  
同  
然  
、  
同  
じ  
天  
窓  
か  
ら  
一  
口  
で  
も  
、  
変  
化  
の  
口  
に  
幅  
つ  
た  
か  
ろ  
う  
と  
、  
緒  
だ  
け  
新  
し  
い  
の  
を  
着  
け  
た  
や  
つ  
を  
、  
苛  
高  
が  
わ  
り  
に  
手  
首  
に  
か  
け  
て  
、  
ト  
ま  
ず  
、  
金  
剛  
杖  
を  
突  
立  
て  
て  
、  
が  
た  
が  
た  
と  
上  
り  
ま  
し  
た  
。  
約  
束  
通  
り  
、  
ま  
ず  
何  
事  
も  
な  
く  
、  
峠  
へ  
か  
か  
つ  
た  
で  
ご  
ざ  
り  
ま  
す  
。」

「猿ヶ馬場へ、」

「さようで、たてば立場の焼跡へ、」

「はあ成程。」

「縄張のあります処から、ここぞともはや面おもてを装い、チャクと黒

鬼に構えました。

仔細しさいなく、鼻の穴から麓ふもとまで見通し、潤かっと睨にらんだ大の眼まなこは、こ

この、「

と額しわに皺しわを寄せて、

「汗を吹抜きの風かざとお通し……さして難渋にもござらんだが、それでも素面のようではない。一人前、顔しよだけ背負あつて歩ある行く工合で、何となく、坂路はかどが抄取りはかどりません。

馬場ばんばへ懸かかると、早や日脚ひかくが摺すつて、一面に蔭かげつた上、草も手入ていれらずに生え揃そろうと、綺麗きれいに敷敷くでござりましてな、成程、早咲はやさきの桔梗ききようが、ちらほら。ははあ、そこらが埋井戸うもれか……薄すすきがざわざわと波を打つ。またその風の冷たさが、颯さつと魂たまを濯あらうような爽快さわや



いだものではなく、気のせいか、ぞくぞくと身に染みます。

おのれ、と心をまず丹田たんでんに落おちつけたのが、氣ばかりで、炎天の草いきれ、今鎮まろうとして、這廻はいまわるのが、むらむらと鼠色うねに畝うねつて染めるので、変に幻の山を踏む——下駄の齒がふわふわと浮上る。

さあ、こうなると、長し短し、面被めんかぶりでござるに因あつて、眼がんは明あかるいが、面つらは真暗まつくら、とんと夢の中に節穴のぞを覗のぞく——まず塩あんば梅い。

それ、躓つまずくまい、見当を狂わすなど、俯向うつむきざまに、面をぱくぱく、鼻の穴で撓ためる様子が、クン、クンと嗅かいで、

(やあ人臭いぞ。)

と吐きほぞそうな。これがさ、峠にただ一人で遣るや拳動ふるまいじゃ、我ながら攫さらわれて魔道を一人旅の異変な体てい。」

「まったく……ですね。」

と三造は頷うなずいたのである。

「な、貴辺あなた、こりやかのような態げをするのが、既にものに魅せられたのではあるまいか。はて、宙へ浮あがいて上るか、谷へ逆さか様ではなからうか、なぞと怯気おしけがつくと、足が窘すくんで、膝がつくり。

や、や、このまんまで、窮いきついては山車人形の土用干——堪たまらんと身悶みもだえして、何のこれ、若衆わかいしゆでさえ、婦人おんなの姿を見るまでは、向顛むこうはちまき巻ゆるが弛ゆるまなんだに、いやしくも行者の身として、—

—

## 十一

「ごもつともですね。」

ちとこれが不意だったか、先達は、はたと詰<sup>つま</sup>つて、擦<sup>くすくつ</sup>たい顔<sup>がんし</sup>色<sup>よく</sup>で、

「痛<sup>いたみい</sup>入ります、いやしくも行者の身として……そのしだらで、」  
境は心着いて、気の毒そうに、

「いいえ、いいえ。」

「何<sup>てまえ</sup>、私もその気で仰<sup>おっしや</sup>有ったとは存じませぬがな、はッはッはッ。  
ッ。

わらいごと  
笑事

ではござらぬ。うむとさて、勇気を起して、そのまま  
 駆下りれば駆下りたであります。が、せつかくの処へ運んだものを、  
 ただ山を越えたでは、炬燵櫓こたつやぐらを跨またいだ同然、待て待て禁札を打  
 つて、先達が登山の印を残そうと存じましたで、携えました金剛  
 を、一番突立つたてておこう了りようけん。簡。

薄すすきの中へぐいと入れたが、ずぶりと参らぬ。草の根が張つて、  
 ぎしぎしいう、こじつたが刺さりません。えいと杖の尖さきで捏こねる内  
 に、何の花か、底光りがして艶つやを持った黄色いのが、右の突捲つきまく  
 りで、薄すすきなりに、ゆらゆら揺れたと思うと、……」

「おお！」

「得も言われぬ佳いい匂においがしました。はてな、あの一軒家の戸口を

覗くと、ちらりと見えた——や、その艶麗なことと申すものは、

時ならぬ月が廂から衝と出たように、ぱつと目に映るといふと、手も足も突張りました。

必ず、どんな姿で、どんな顔立じやなぞとお尋ね御無用。まだまだ若衆の方が間違いにもいたせ、衣服の色合だけでも覚えて来たのが目つけものじや。いやはや、私の方はただ颯と白いものが一軒家の戸口に立ったと申すまで——衣服が花やら、体が雪やら、さような事は真暗三宝、しかも家の内の暗い処へ立たれた工合が、牛か、熊にでも乗られたようでな、背が高い。

(鬼じや、)

と、私てまえ一つ大声を上げました。

(鬼じゃ、鬼じゃ。)

と、こうぬつと腕を突張つっぱつた。金剛杖こんごうづえを棄置いて、腰の据すわら

ぬ高足をどうと踏んで、躍おどり上あがるようにその前を通つた、が、可お

笑かしい事には、対方さきが女にょしやう性せいじゃに因つて、いつの間にか、自分

ともなく、名告なのりが慇懃いんぎんになりましたな。……

(鬼でござる。)

と夢中で喚わめいて、どうやら無事に、猿ケ馬場は抜けました。で、

後はこの坂一なだれ、転げるように駆下りたでございます。――

処で、先刻の不調法、

と息を吐つき、

「何とも、恥を申さぬと理が聞えませぬ、仔細しさいはこうでござりま  
す——が、さて同一人間おなじ……も変なれども、この際……とでも申  
すかな、その貴辺あなたを前に置いて、今お話をします段になるとい  
うと、いや、我ながらあんまりな慌て方、此方こなたこそ異形を扮装いでたち  
をしましたけれども、彼方あなたは何にせよ女体でござる。風説うわさの通り、  
あの峠茶屋の買主の、どこのか好ものずき事な御令嬢が住居すまいいたさるる  
でも理は聞える。よしや事あるにもせい、いざと云う時に遁出にげだし  
ましても可よさそうなものじゃつたに……

……と申すがやはり、貴辺あなたにお目に掛かりましてからの分別で。  
ぱつと美しいもので目が眩くらみました途端には、ただ我を忘れて、

(鬼じゃ。)

と拳こぶしを握りました。

これだけでは、よう御合点はなりますまいで、私てまえのその驚き方と申すものは、変った処に艶あでやか麗やかな女中の姿とだけではござらぬ。日の蔭りました、俱利伽羅峠あまのこがらの猿ヶ馬場で、山氣さんきの凝こつて鼠色ねずみいろの靄もやのかかりました一軒家、廂ひあわい合あから白昼、時ならぬ月が出たのに仰天した、と、まず御推量おしりょうが願ねがいたい——いくらか、その心持が……お分わりになりました。うかかな。」

## 十二

「分わりました。」



と三造は衣紋えもんを合わせて、

「何ですか、その一軒家というのは、以前の茶屋なんでしょう、左側の……右側のですか。」

「御存じかな。」

「たびたび通つて知っています。」

「ならば御承知じや。右側の二軒目で、鍵屋かぎやと申したのが焼残つておりますが。」

「鍵屋、——二軒目の。」

と云つて境は俯向うつむいた。峠に残つた一軒家が、それであると聞  
くまでは、あるいは先達とともに、旧来もとた麓ふもとへ引返そうかとも迷  
つたのである。

が、思う処あつて、こう聞くと直ぐに心が極きまつた。

様子は先達にも見て取られて、

「ええ、鍵屋なら、お上りあがになりますかな。」

「別に、鍵屋ならばというのじゃありませんが。これから越しま  
す。」

と云つて、別離わかれの会釈つむりに頭を下げたが、そこに根を生はやして、傍わ  
目きめも触ふらず、黙っている先達に、気を引かれずには済まなかつた。

「悪いんですか、参つては。」

山伏は押眠つた目を瞬いて開けた。三造を右瞻とみこうみ左瞻ひだりこうみで、

「お待ち下さい。血氣けきに逸はやり、我慢に推おし上のぼろうとなさる御仁な  
ら、お肯入ききいれのないまでも、お留め申まをしすが私年効わたくしねんがうではあります

が、お見受け申した処、悪いと言え、それでもとはおつしやり  
 そうもない。その御心得なれば別儀ござるまいで、必ず御無用と  
 は申上げん。

峠でその婦人を見るものは……云々うんぬんと恐るべき風説はいたす  
 が、現に、私てまえとても御覧のごとく別条はないようで、……折角じ  
 や、いつそのことお出いでが宜よろしい。」

「ああ、それはどうも難ありがた有いい。」  
 と三造は礼を云う。許されたような気がしたのである。

「さ、さ、」

先達も立構えで、話の中うちに撈むしつて落した道芝の、帯の端折目はしよりめ  
 に散りかかった、三造の裾を二ツ三ツ、煽あおぐように払はたいてくれた。

「ところで、」

顔を振つて四辺あたりを見た目は、どつちを向いても、峰の緑、処々に雲が白い。

「この日脚じゃ、暮切らぬ内峠は越せます、が坂は暗くなるでござろう。——急ぎの旅ではなかりうで、手前まもお守りをいたす、麓ふもと

の御堂みどうで御一泊のように願います。無事にお越しの御様子も伺いたい。留守には誰も居おらず、戸棚には夜具一組、蚊帳もござる。  
てまえ

私は、急いで、竹の橋まで下くだりますで、汽車でぐるりと一廻り、直ぐに石動から御堂へ戻ると、貴辺あなたはまだ上りがある。事に因ると、先へ帰つて茶を沸わかして相待てます。それが宜しい、そうなさつて。ああ、御承知か。重畳々々。

就きましては、」

かさかさと胸を開いて、仰向けあおむに手に据えた、鬼の面は、紺こんじ

青ようの空に映つて、山深き径こみちかすかに幽なる光を放つ。

「先生方にはただの木の面形めんがたでござれども、現てまえに私が試みまし

た。驚破すわとある時、この目を通して何事も御覧が宜しい。さあ、

お持ちなさるよう。」

三造は猶予ためらいつつ、

「しかし、御重宝、」

「いや、御役に立てば本懐であります。」

すなわち取つて、帽子をはずして、襟にかける、と先達の手に

鐸すずが鳴つた。

「御無事で、」

「さようなら。」

ひぐらし

蝸の声に風颯と、背を押上げらるるがごとく境は頭を峠に上げ

た。雲の峰は縁を浅葱に、鼠色の牡丹をかさねた、頂白くキラキ

ラと黄金の条の流れたのは、月がその裡に宿つたろう。高嶺の霞

に咲くという、金色の董の野を、天上遥かに仰いだ風情。

せいざんひはぼつしてとうざんくらし

西山日没東山昏。旋風吹馬馬踏雲。

こごえ

低声に唱いかけて、耳を澄ますと、鐸の音は梢を揺つて、薄暗

い谷に沈む。

じよふさげをそそくもくうにみつ  
 女巫 澆酒 雲満空。 ぎよくろたんかにおいととう。 かいしんさん  
 きざちゆうにきたる 玉炉炭火香 馨馨。 海神山  
 鬼来座中。 紙銭※窄鳴※風。 相思木帖金舞鸞。  
 さんがいつそうまたいつたん。 ほしをよびおにをめしはいばんをきんす  
 攢蛾一※ 重 一 弾。 呼星召鬼 歆杯盤。  
 さんみくらうときひとしんかんす  
 山魅 食時人 森寒。

境の足は猿ケ馬場に掛つた。 今や影一つ、山の端に立つのである。

しゆうなんのにつしよくわんにひくし。 かみやとこしなえにうむのあいだにあり。  
 終南 日色 低平湾。 神兮 長有有無間。  
 こし  
 越の海は、雲の模様つこくに隠れながら、青い糸の縫目を見せて、北  
 国つこくの山々は、皆黄昏たそがれの袖たそがれを連ねた。

「神兮長に有無の間にあり。」

胸を見ると、背中まで抜けそうな眼が潤と、鬼の面が馬場を睨にらんで、ここにも一人神がたたずイむ、三造は身自から魔界を辿たどる思おもがある。

峠ふるみちのこの故道は、聞いたよりも草が伸びて、古沼の干た、蘆あしの茂しげりかと疑うばかり、黄にも紫にも咲交じった花もない、——それは夕暮のせいもある。が第一に心懸けた、目標めじるしの一軒家はもや霧も掛かからぬのに屋根も分らぬ。

場所が違つたかとも怪しんだ、けれども、踏ふみ迷まよう路続きではない。でいよいよ進むとしたが、ざわざわ分入らねばならぬ雑草に遮られて、いぎ、と言う前、しばらくを猶ためら予うて立つと、風が誘つて、時々さらさらさらさらと、そこらの鳴るのが、虫の声の



交らぬだけ、余計に響く。……

ひよつこり肌脱の若衆わかいしゆが、草鞋穿わらしばきで出て来そうでもあるし、続いて、山伏がのさのさと頭あちわれそうにもある。大方人の無い、こんな場所へ来ると、聞いた話が実際の姿になって、目前めさきへ幻影まぼろしに出るものかも知れぬ。

現にそれ、それぞれ、若衆が、山伏が、ざわざわと出て、すつと通る——通ると……その形が幻まぼろしを束つかねた雲うみになって、颯さつと一つ谷へ飛ぶ。程もあらせず、むつくりと湧わいて来て、ふいと行くゆくと、いつの間にか、草の上へちぎれちぎれに幾つもある。中には動かずに凝じつと留とどまって、裾すその消えそうな山伏が、草の上に漂々として吹かれもやらず浮くのさえある。

またふわりと来て、ぱつと胸に当つて、はつとすると、他愛も  
なく、形なく力もなく、袖を透かして背後へ通る。

三造は誘われて、ふらふらとなつて、ぎよつとしたが、つらつ  
ら見ると、むこうに立つた雲の峰が、はらはらと解けて山中へ拡  
がりつつ、薄の海へ波を乱して、白く翻つて、しかも次第に消え  
るのであつた。

「ああ、そうか……」

山伏は<sup>おおまた</sup>大跨で、やがて麓へ着いた時分、と、<sup>あしもと</sup>足許の杉の梢  
にかかつた<sup>ひとひら</sup>一片の雲を透かして、<sup>なつかし</sup>里可懐く麓を望んだ……時  
であつた。

今昇つた坂<sup>ひとうね</sup>一畝り<sup>さが</sup>下た処、<sup>あとさき</sup>後前草がくれの径の上に、波に

乗つたような趣して、二人並んだ姿が見える——ひとし齊く雲のたたずまいか、あらず、その雲には、淡いいろどりが彩があつて、髪が黒く、おもかげ俤が白い。帯の色も、その立姿の、肩と裾を横に、胸高に、ほっそ細りと劃くぎつて濃い。

道は二町ばかり、間は隔へだたつたが、翳かげせばやがて掌てのひらへ、その黒髪が薰りそう。直ぐ眉の下に見えたから、何となく顔立ちの面長おもながらしいのも想像された。

同時に、その傍かたわらのもう一人、瞳を返して、三造は眉を顰ひそめた。まさしく先刻の婆ばばらしい。それが、黒い袖の桁短ゆきかに、皺しわの想わゆる手をぶらりと、首くび桶おけか、骨こつ瓶がめか、風呂敷包を一ひとつ包つつみ提ひげていた。

境が、上から伸懸のしかかるようにして差覗さしのぞくと、下で枯枝のよう  
な手を出した。婆がその手を、上に向けて、横ざまに振つて見せ  
た。

たしかあいず  
確に暗号に違いない、しかも自分にするのらしい。

「ええ。」

胸倉を取つて小突かれるように、強く此方こなたへ応こたえるばかりで、  
見るなか、行ゆけか、去れだか、来いだか、その意味がさつぱり分  
らぬ。その癖、烏が横よこぐわ脚あしえにして飛びそうな、厭いやな手つきだと  
しみじみ感じた。

その内に……婆の手の傍かたわらから薄すすきが靡なびいて、穂のような手が動いた。密そつと招いて、胸を開くと、片袖を搔か込みながら、腕かいなをしなやかに、その裾すそのあたりを教えた。

そこへ下りて来よ、と三造に云うのである——

意味は明あきらかに、しかも優うしく、美うるわしく通じたが、待て、なぜ下へ降りよ、と諭す？

峠を越すな、進んではならぬ、と言うか。自分我われにしか云うものが、婦人おんなの身でどうして来た、……さて降りたらば何とする？  
ずんずん行ゆけば何とする？

すべてかかる事に手間隙取ひまって、とこうするのが魔まが魅さすので

ある。——構わず行こう。

「何だ。」

谿間たにまの百合の大輪おおりんがほのめくを、心は残るが見棄てる気構え。踵くびすを廻らし、猛然と飛入るがごとく、葎むぐらの中に躍込んだ。ざ、ざ、ざらざらと雲が乱れる。

山路に草を分ける心持は、水練を得たものが千尋ふちの淵ふちの底を探るにも似ていよう。どつと滝を浴びたように感じながら、ほとんど盲めくらへび蛇へびでまっしぐらに突いて出ると、颯さつと開けた一場の広場。前面にぬっくり立った峯の方へなぞえに高い、が、その峰は俱利伽羅の山続きではない。越中の立山が日も月も呑んで真暗まっくらに聳そびえたのである。ちようど広場とその頂との境に、一条ひとすじ濃い靄もやが

懸かつた、靄みの下かに、九十九谷つくもだにに介はまつた里きと、村と、神通じんつう、射い水みの二大川だいせんと、富山の市まちが包ままるる。

さればこそ思い違えた、——峠たてばの立場はここなので。今し猿ヶ馬場ぞと認めたのは、道を急いだ目の迷い、まだそこまでは進まなかつたのであつた。

紫きに桔梗ききようの花を織出した、緑せは氈せんを開いたよう。こんもりとした果はには、山の瘦やせた骨が白い。がばと、またさつくりと、見覚えた岩も見ゆる。一本の柿、三本の栗おい、老樹きの桃もあちこちに、夕暮を涼みながら、我を迎うる風情たにイたむ。

と見れば鍵屋いは、礎いが動しいたか、四辺あの地勢たが露む出しきになつたためか、向う上りに、ずずんと傾き、大船を取つて一艘頂そに据うえ

たるごとく、おごそか 巖にかつ寂しく、かたびさし 片廂をぐいと、山の端はから空へ離して、みよし 舳の立つた形して、立山の波を漕がんとす。  
境は可なつかし懐げに進み寄つた。

「や！」

その門かどぐち口に、美しい清水が流るる。いや、水のような棲つまこぼが溢れて、わきあけ脇明の肌ちらちらと、白なでしこい撫子の乱みだれざき咲を、帯で結んだ、浴衣の地の薄うすお納戸。

すらりと草に、姿横に、露を敷いて、雪かいなの腕力なげに、ぐたりと投げた二の腕に、枕すともなく艶つややかな鬢びんを支えた、前髪を透く、清らかな耳みみもと許かすかの、幽もに洩るる俯うつむ向き形なり、膝を折つて打伏した姿を見た。



冷い風が、衝と薫つて吹いたが、キキと鳴く鼯も聞えず、その婦人が蝦蟇にもならぬ。

耳が赫と、目ばかり冴える。……冴えながら、草も見えず、家も暗い。が、その癖、件の姿ばかりは、がつくり伸ばした頸の白さに、毛筋が揃つて、後れ毛のはらはらと戦ぐのまで、瞳に映つて透通る。

これを見棄てては駆抜けられない。

「もし……」

と言いもあえず、後方へ退つて、

「これだ！」

とつい出た口許を手で压える。あとから、込上げて、突ぱじけ

て、

「……顔を見ると……のっぺらぼう——」

と思わずまたひとりごと独言。我が声ながら、変に掠かすれて、まるで先刻つきの山伏おんの音。「今も今、手を掉ふった……ああ、頻しきりに留めた……」  
と思うと、五体を取しめつつて緊附しめつけられる心地がした。

## 十五

けれども、まだ幸さいわいに俯向うつむけに投出なげだされぬ。「触たらぬ神たたりに崇たたりなし……」

非常な場合に、極めて普通な諺が、記憶から出て諭す。諭されて、直ぐに踏出して去ろうとしたが……病難、危難、もしや——とすれば、このまま見棄つべき次第でない。

境は後髪を取つて引かれた。

洋傘を置いて、おずおずその胸に掛けた異形の彫刻物をまた視めた。——今しがた、ちぎれ雲の草を掠めて飛んだごとく、山伏にて候ものの、ここを過つた事は確かである。

確で、しかもその顔には、この鬼の面を被つていた。——時に、門口へ露われた婦人の姿を鼻の穴から覗いたと云うぞ。待てよ、縄張際の坂道では、かくある我も、ために尠からず驚かさされた。

おお、それだと、たとい須磨に居ても、明石に居ても、姫御前

は目をまわそう。

三造は心着いて、夕露の玉を鏤ちりばめた女の寝姿に引返した。

「鬼じゃ。」

試みに山伏の言を繰返して、まさしく、怯おびかされたに相違ない  
と思つた。

「鬼じゃ。……」

と一足出てまた呶つぶやいたが、フト今度は、反対に、人を警いましむる山  
伏の声に聞えた。勿なかれ、彼は鬼なり、我に与えし予言にあらずや。  
境は再び逡巡した。

が、凝じつと瞻みつめて立つと、衣きぬの模様の白い花、撫おも子の倂かけも、一目  
の時より際立って、伏ふしかく隠れた膚はだの色の、小おく草さに搦からんで乱れた有

様。

手に触ると、よし蛇の衣きぬとも変ならば化なれ、熱いと云つても月は抱いだく。

三造は重い廂ひさしの下に入つて、背に盤ばん石じやくを負いながら、やつと婦おんなの肩際しやがに蹲しゃがんだのである。

耳許みみはずれに密そと覗のぞく。俯うつむ向けのその顔斜なめなれば、鼻かと思おもうのがすつとある、ト手を翳かざしもしなかつたが、鬢びんの毛けが、霞かすかのように、何となく、差寄さよせた我が眉まゆへ触ふるのは、幽いに呼い吸きがあり  
 そうである。

「令嬢じようさん。」

とちよつと低こゝろ声こゝろに呼よんだ——爪つまはずれ、帯さの状ま、肩かたの様よう子こ、山や

家の人でないばかりか、髪のかざりの当世さ、鬢の香さえも新しい。

「嬢さん、嬢さん——」

とやや心易げに呼よび活いけながら、

「どうなすつたんですか。」

とその肩に手を置いたが、花はな弁びらに触るにひと齊いしい。

三造は四あ辺たりを見て、つつと立って、門口から、真ま暗くらな家やの内

へ、

「御免。」

「ほう……」

と響いたので、はっと思うと、ううと鳴こつてだまと知れた。自分

の声が高かった。

「誰も居ないな。」

美女の姿は、依然として足許に横よこわる。無む慚ざんや、片かた頬ほは土に着つき、黒髪が敷居にかかつて、上うぎまに結むすびびめ目高めう根ねが弛ゆるんで、簪かんざしの何か小さな花が、やがて美しい虫になつて飛びそうな。

しかし、煙にもならぬ人を見るにつけて、——あの坂の途中に、可い厭やな婆と二人居て手を掉ふつたことを思うと、ほとんど世を隔へてた感がある。同時に、渠かれ等怪あやしき輩からが、ここにかかる犠い牲けにえのあるを知らせまいとして、我を拒んだと合点さるるにつけて、とこう言う内うちに、追おつて来きて妨さまたげしよう。早せきく助ごけごろろずば、と急せき心ごころにかつつ赫かつとなつて、戦おのく膝ひざを支たいで、ぐい、と手を懸かける、とぐつたり

した腕かいなが柔かに動いて、脇わき明あけをすべにこした手尖てさきが胸へかかった処を、  
 ずつと膝を入れて横抱いきに抱だき上げると、仰あおむ向けに綿のを載のせた、  
 胸むねがふつくりと咽のど喉どが白しろい。カチリと音おとして、櫛くしが鬼おにの面おもてに触ふつ  
 たので……慌あわてて、かなぐり取とって、見当まも附つけず、どん、と背う  
 後しろへ投ほうつた。

「山伏さんぶつめ、何を言う！」

十六

「いや、もう、先方さきが婦人おんなにもいたせ、男子おとこにもいたせ、人間にんげんで  
 さえありますれば、手前しぜんは正しょうのもの鬼おにでござる。——狼おおかみが法衣ころもよ



り始末が悪い。世間では人の皮着た畜生と申すが、鬼の面を被つた山伏は、さて早や申訳がない。」

御堂の屋根を蔽い包んだ、杉の樹立の、廂を籠めた影が射す、  
 炉の灰も薄蒼う、茶を煮る火の色の※と冴えて、埃は見えぬが、  
 休息所の古畳。まちなし黒木綿の腰袴で、畏つた膝に、両の  
 腕の毛だらけなのを、ぬい、と突いた、賤しからざる先達が総  
 髪の人品は、山一つあなたへ獅嚙を被つて参りしには、ちと分別が見え過ぎる。

「怪しからぬ山伏め、と貴辺がお思いなされたで好都合。その御婦人が手前の異形に驚いて、恍惚となられる。貴辺は貴辺で、手前の野譚言を真実と思召し、そりやこそ鬼よ、触らぬ神に祟

りなしの御思案で、またまたお見棄てになつたとします、御婦人がそれなりで御覧じろ、手前は立派な人殺ひところしでございます。何も、げし人にんに立派は要らぬが、承りましただけでも、冷汗になります。

いや、それにつけても、」

と山伏の肩が聳そびえ、

「物事と申すは、よく分別をすべきであります。私てまえども身柄、鬼神を信ぜぬと云うもいかげですが、軽かるはずみ忽あたまに天窓あやしから怪あやしくして、さる御令嬢ひきがえるを、蠶へんげ、土蜘蛛へんげの変化同然に心得ましたのは、俗にそれ……棕櫚しゅろぼうき箒まきが鬼、にも増まきつた狼狽うろたえ方、何とも恥入のつて退のけました。

——（山伏め、何を吐す。<sup>ぬか</sup>）——結構でござるとも。その御婦人をお救けなさって、手前もお庇<sup>かげ</sup>で助かりました。

いかにも、不意に貴辺<sup>あなた</sup>にお出逢い申したに就いて、体<sup>てい</sup>の可<sup>い</sup>怪談をいたし、その実、手前、峠において、異変なる扮装<sup>いでたち</sup>して、昼強盗、追<sup>おい</sup>落<sup>おとし</sup>はまだな事、御婦人に対し、あるまじき無法不礼を働いたように思召したも至極の至りで。」

「まあ、お先達、貴下<sup>あなた</sup>、」

対向<sup>さしむか</sup>いの三造は、脚絆<sup>きゃはん</sup>を解いた瘦脛<sup>やせずね</sup>の、疲切<sup>つかれき</sup>った風し  
ていたのが、この時遮る。……

「いやいや、仰せではありませんが、早い話が、これが手前なら、やっぱり貴辺をそう存ずる、……道でござる、理でございます。」

しかし笑つて遣わされ。まず山中毒やまあたりとでも申すか、五里霧中とやらに徘徊さまよいました手前、真人間から見ますると狂人の沙汰ですが、思いの外時刻が早く、汽車で時の間まに立帰りましたのを、何か神通で、雲に乗つて馳はせ戻つたほどの意気組。その勢いきおいでな、いらだか、苛いらつて、揉もみ上げ、押摺おしすり、貴辺が御無事に下山のほどを、先刻この森の中へ、夢のようにお立出たちいでになつた御姿を見まするまで、明王の霊前いのりに祈を上げておりました。

それもつて、貴辺が、必定、お立寄り下さると信じましたからで。

信じながらも、思い懸けぬ山路やまみちに一人憩やすんでござつた、あの御様子を考えると、どうやら、遠い国で、昔々お目に懸かかつたよう

な、茫ぼうとした気がしまして、眼めのまえ前に焚たきました護摩ごまの果はてが霧になつて森へ染み、森へ染み、峠かたの方をおを蔽おほい隠すようにもござつた。

……

何にせよ、私てまえどうかしていたと見えます。兎はちよいちよい、猿も時々は見懸けますが、狐狸は気もつきませぬに、穴の中からでも魅やりましたかな。

明王もさぞ呆れ返つて、苦笑いなされたに相違ちがござらん。私てまえの痴たわけさ加減、——ああ、御無事を祈るに、お年とし紀も分らぬ、貴辺の苗字だけでも窺うかがつておこうものを、——心着かぬことをした。」

総髪をうしろへ撫でる。

「などと早や……」

三造は片手をちゃんと炉縁ろぶちに支ついて、

「ありがと難有う存じます。御厚意、何とも。」

## 十七

あらた更めて、

「お先達、そうやって貴下あなたは、御自分お心得違いのようにはかり  
お言いですが、——その人を抱き起して美しい顔を見た時、貴下  
に対して心得違いしましたのは、私の方じゃありませんか。

そして、無事、」

と言ひ懸けたが、寂しい顔をした、——実は、余り無事でばかりもなかつたのであるから。

「ともかくも……峠を抜けられましたのは、貴下が御祈念の功德かも知れません——たしか確に功德です。

そうでないと、今頃どうなっていたか自分で自分が解らんのです。何ともお礼の申上げようはありません。實際。

その人だつて、またそうです——あの可おそろし恐い面のために氣絶をした。私が行かないとそのまま一命が終つたかも知れない、と言えば、貴下に取りつて面倒になりますけれども、ただ夢のように思つたと、彼方あちらで言います——それなり茫となつて、まあ、すやすやと寐ね入つたも同じ事で。たとい門口に倒れていたつて、茎じくが

枯れたというんじやなし、姿の萎しほんだだけなんです……露が降りれば、ひとりでにまた、恍惚うっとりと咲いて覚める、……殊に不思議な花なんですもの。自然の露がその唇くちびるに点滴したたらなければ点滴らな  
いで、その襟の崩れから、ほんのり花弁はなびらが白んだような、その人自身の乳房から、冷い甘いのを吸い上げて、人手は藉からないで  
も、活いきかえ返るに疑いない。

私は——膝へ、こう抱き起して、その顔を見た咄嗟とっさにも、直ぐにそう考えました。——

こりや余計な事をしたか。自分がこの人を介抱しようとするのは、眠った花を、さあ、咲け、と人間の呼吸いきを吹掛けるも同一おんなじだと。……



で、懐ふところ中の宝丹でも出すか、じたばた水でも探してからなら、  
 まだしもな処を、その帯腰から裾すそが、私に起こされて、柔かに揺  
 れたと思うと、もう睫毛まつげが震えて来た。糸のように目を開あいたん  
 ですから、しまった！ となお思っただんです——まるで、夕顔の  
 封じ目を、不作法に指で解いたように。

はツとしながら、玉を抱いた逆の上ほせ加減で、おお、山やま蟻ありが這は  
 ってるぞ、と真ま白しろな咽喉のどの下を手で払はくと、何と、小さな黒子ほくろ  
 があつたんでしよう。

逆さかに温かかな血ちの通かうのが、指さの尖さきへヒヤリとして、手がぶるぶ  
 るとなつた、が、引込ひっこめる間まもありません。婦おんながその私の手首を、  
 こう取ると……無意識むいしのようじゃありませんでしたが、下の襟えりを片手で

取つて、ぐいと胸さがりに脇へ引いて、搔かき合わせたので、災難にも、私の手は、馥ふく郁いくとももの薫る、襟裏へ縫留められた。さあ、言わないことか、花卉はらびらの中へ迷込んで、虻あぶめ、蛭もがいても拔出されぬ。

困窮と云いますものは、……

黙つちやいられませんから、

(御免なさいよ。)

と、のつけから恐入った。——その場の成行きだったんですな。

「いかにも、」

と先達は、膝に両手を重ねながら、目を据えるまで聞入るので

ある。

「黙っています。が、こう、水の底へ澄切つたという目を開いて、じつと膝を枕に、腕かいなに後毛おくれげを掛けたまま私を見詰める。眉が浮くように少し仰向あおむいた形で、……抜けかかった櫛くしも落さず、動きもしません。

黙つちやいられませんから、

（気がついたんですか。失礼を、）

まだ詫わびをする工合ぐあいの悪さ。でも、やっぱり黙っています。

（気分はどうなんです。ここに倒れていなすつたんだが。）

これで分つたらう、放したまえ、早く擦抜けようと、もじつくのが、婦おんなの背せなを突ゆすぶいて揺ゆすぶるようだから、慌すくててまた窘すくまりました

よ。どこを糸で結んで手足になったか、女の身体からだがまるで綿で：

…」

## 十八

「綿で…：重いことは膝が折れそう——もつともこの重いのは、あの昔話の、怪あやしい者が負おぶさると途中で挫ひしげるほどに目貫めかたがかかるっていう、そんなのじゃない。そりや私にも分っていました、…：…

ああ、これはなぜ私が介抱したか、その人はどうしていたか、そんな事なんぞ言ってるのではまだるツこい。

（失礼しました、今何です、貴女の胸に蟻が這っていたもんですから、）

つい払って上げよう、と触ったんだ、とてつきりそれがために、そんな様子で居るんだろう、と気が着いて、言訳をしましたかね。黙っています……ちつとも動かないで、私の顔を、そのまま見詰めてるじゃありませんか。」

と三造は先達の顔をみまも瞻つて、

「じゃ、まだ気が遠くなつたまままで、何も聞えんのかと思えば、……顔よりは、私が何か言うその声の方が、かえつてその人の瞳に映るような様子でしょう。梔くちなし子の花でないのは、一目見てもはじめから分つてます。

弱りました。汗が冷く、慄ぞつ気と寒い。息が発はず奮ずんで、身内が震う処から、取ったのを放してくれない指の先へ、ぱつと火がついたように、ト胸へ来たのは、やあ！こうやって生血を吸い取る：

…」

「成程、成程、いずれその辺で、大概ひきつ気絶つけてしまうのでござろう。」

と先達は合がってん点んする。

「転てんどう倒うしても気は確たしかで、そんなら、振切つても勿はねあが上あったかと言いえば、またそうもし得えない、ここへ、」

境は帯おきを圧おさえつつ、

「天女の顔の刺ほりもの繡のして、自分の腰から下はさながら羽衣の裾に

なってる姿でしょう。退のきも引きもなりません。いや、ならん  
 じやない、し得なかつたんです——お先達、」

と何か急せきながら言い淀よどんで、

「話わに聞いた人面瘡じんめんそう——その瘡かさの顔かほが窈よう窕ちようとしてるので、  
 キツス接吻けつぶんを……何なにです、その花の唇くちびるを吸すおうとした馬鹿ばかものがあつた  
 とお思いなさい。」

と云うと、先達は落着おちいた面おも色もちで、

「人面瘡じんめんそう、ははあ、」

さも知ち己かづのような言いぶりぶりりで、

「はあ、人面瘡じんめんそう、成程なるほど、その面つらが天あま人のようように美うしい。芙ふ蓉よまの眦な、  
 丹花にっかの唇くちびる——でござつたかな、……といたして見みると……お待まちち

なさい、愛着あいじやくの念が起つて、花の唇を……ふん、」

と仰向あおもむいて目を瞑ねむつたが、半眼になつて、傾きざまに膝そを密そと

打ち、

「津々しんしんとして玉としたたる甘露の液と思ふのが、実は膿汁うみしると

いたした処で、病人の迷うのを、強あながち白痴たわけとは申されん、——む

む、さようなお心持でありましたか。」

真顔で言われると、恥じたる色して、

「いいえ、心持と言うよりも、美人を膝いだに抱いたなり、次第々々

に化石でもしそうな、身動きのならんその形がそうだったんです。

……

段々孤家ひとつやの軒が暗くなつて、鉄板で張つたような廂ひさしが、上か



ら<sup>おつぶ</sup>圧伏せるかと思われます……そのまま地獄の底へ落ちて行くかと、心も消<sup>きえぎえ</sup>々となりながら、ああ、して見ると、坂下で手を掉<sup>ふ</sup>つた気高い女<sup>によしやう</sup>性は、我らがための仏であつた。——

この難を知つて、留められたを、推して上つたはまだしも、ここに魔物の倒れたのを見た時、これをその犠<sup>いけにえ</sup>牲などと言う不心得。

と俯<sup>うつむ</sup>向いて、熟<sup>じつ</sup>と目を睡<sup>ねむ</sup>ると……歴<sup>まぎまぎ</sup>々々と、坂下に居たその婦<sup>おんな</sup>の姿、——羅<sup>うすものえもん</sup>の衣紋の正しい、水の垂れそうな円<sup>まるまげ</sup>髻に、櫛<sup>くし</sup>のてらてらとあるのが目<sup>め</sup>前<sup>まへ</sup>へ。——

驚いた、が、消えませぬ。いつの間にか暮れかかる、海の風<sup>な</sup>ぎたような緑の草の上へ、渚<sup>なぎさ</sup>の浪のすらすらとある靄<sup>もや</sup>を、爪<sup>つま</sup>さきの

白う見ゆるまで、浅く踏んで、どうです、ついそこへ来て、それが私の目の前に立つてるじやありませんか。私を救うためか。

と思うと、どうして、これも敵方の女將軍じよしようぐん。」

「女將軍？ええ、山賊の巢窟そうくつかな。」

と山伏はきよとんとする。

## 十九

「後で聞きますと、それが山へ来る約束の日だったので、私の膝に居る女が、心こころまち待まちに古家ふるいえの門かどぐち口くちまで出た処へ、貴下あなたが、例の異形で御通行になつたのだそうです。

その円鬚まげに結いった姉あねの方は、竹の橋から上ったのだと言いました。つい一ひとすじ条路みちの、あの上りを、時刻も大抵同じくらい、貴下は途中でお逢いになりはしませんでしたか。」

先達は怪訝けげんな顔して、

「されば、……ところで、その婆さんはどうしましたな、坂下に立ったのを御覧になった時は、傍そばについていたというお話続きの、」

とかえつてたずねる。

「それは峠までは来ませんでした。風呂敷包みがあつたので、途中見懸けたのを、頼んで、そこまで持たして来たのだそうで、……やっぱりその婆さんは、路みちばた傍ばたに二人で立っていた一人らしく

思われます。その居た処は、貴下にお目にかかりました、あの縄張をした処、……」

「さよう。」

「あすこよりは、ずっと麓ふもとの方です。」

「すると、そのどちらかは分りませんが、貴辺あなたに分れて下山の途中で、婆さん一人にだけは逢いました。成程——承れば、何か手に包んだものを持っていた様子で——大方その従伴ともをして登った方でありましような。」

それにしては、お話しはずのその円鬘まげに結いった婦人に、一条路ひとすじみち出会わねばならん筈、……何か、崖の裏、立樹の蔭へでも姿を隠しましたかな。いずれそれ人目を忍ぶという条すじで、」

「きつとそうでしょう。金沢から汽車で来たんだそうですから。」  
先達は目を睜みはつて、

「金沢から、」

「ですから汽車へいらつしやる、貴下と逢違あひだう筈はありません。」  
「旅をかけて働きますかな。」

「ええ、」

「いや、盗どろぼう賊ぞうも便利になった。汽車に乗つて横行じや。倶利伽羅峠たてこもに立籠たてこもつて——御時節ごときぶせがら怪けしからん……いずれその風呂敷包ふしみも、たんまりいたした金目のもののございませうで。」  
黙もくつた三造は、しばらくして、

「お先達。」

「はい、」

と澄ました風で居る。

「風呂敷の中は、綺麗な蒔絵まきえの重箱でしたよ。」

「どこのか、什物じゅうもつ、」

「いいえ、その婦人ひとの台所の。」

「はてな、」

「中に入ったのは鮎あゆの鮎すしでした。」

「鮎の鮎とは、」

「莊しょうがわ河の名産ですって、」

先達は啞然あぜんとして、

「どうもならん。こりや眉毛に唾つばじや。貴辺も一ツ穴の貉むじなではな

いか。<sup>ばけもの</sup>怪物かと思えば美人で、<sup>にんめんそう</sup>人面瘡で天人じゃ、地獄、極楽、<sup>まるまげ</sup>円鬚で、山賊か、と思えば重箱。……宝物が鮎の鮎で、莊河の名物となつた。……待たつせえ、腰を円くそう坐られた<sup>ていたらく</sup>体裁も、森の中だけ狸に見える。何と、この<sup>いろり</sup>囲炉裏の灰に、手形を一つお<sup>お</sup>圧しなさい、ちよぼりと<sup>らくがん</sup>落雁の形でござろう。」

「怪しからん、」

と笑つて、<sup>きお</sup>氣競つて、

「誰も山賊の<sup>すみか</sup>棲家だとも、万引の<sup>かくればしよ</sup>隠場所だとも言わないのに、貴下が聞違えたんではありませんか。ええ、お先達？」

「はい、」

と言つて、瞬きして、たちまち<sup>からから</sup>呵々と笑出した。

「はッはッはッ、慌てました、いや、大狼狽だいろうばい。またしても獅噛しかみを行やつたて。すべて、この心得じやに因よつて、鬼の面を被かぶります。時にお茶が沸きました。——したが鮎あなの鮨ずしとは好もしい、貴下ごしようかんも御賞翫ごしょうかんなされたかな。」

## 二十

「承ふもとつた処では、麓ふもとからその重詰おもむきを土産に持つて、右の婦人が登山あがされたものと見えますな——但しどうやら、貴辺あなたがその鮨あがを召あがると、南蛮なんばん秘法しひれぐすりの痺しびれ薬ぐすりで、たちまち前後不覚しんご、といったよ  
うな気がしてなりません。早く伺うかがいたい。鮨あがはいかがで？」



その時境は煎茶せんちやに心を静めていた。

「御馳走ごちそうは……しかも、ああ、何とか云う、ちよつと屠蘇とその香のする青い色の酒に添えて——その時は、笥かけひの水に埃ほこりも流して、袖の長い、振ふりの開いた、柔かな浴衣に着換えなどして、舌鼓を打ちましたよ。」

「いずれお酌で、いや、承つても、はつと酔う。」  
と日に焼けた額を押撫おしなでながら、山伏は破顔する。

「しかし、その倒れていた婦人ですが、」

「はあ、それがお酌を参つたか。」

「いいえ、世話をしてくれましたのは、年上の方ですよ。その倒れていた女は——ですね。」

「そうそうそう、またこれは面被りめんかぶじや。どうもならん、我ながら慌いてて不可かん。成程、それはまだ一言も口を利かずに、貴辺あなたの膝ひざに抱かれていたて。何をこう先走るぞ。が、お話の不思議さ、気が気でないで急せき立ちますよ、貴辺は余り落着いておいでなさる。」

「けれども、私だつて、まるで夢を見たようなんですから、霧の中を探るように、こう前後あとさきを辿たどり辿りしないと、茫ぼうとして掴つかまされなくなるんですよ。……お話もお話だが、御相談なんですから、よくお考えなすつて下さい。

——その円鬚まるまげの、盛装した、貴婦人という姿のが、さあ、私たちの前へ立ったでしょう。——

膝を枕にしたのが、倒れながら、それを見た……と思つて下さい。

手を放すと、そのまま、半分背を起した。——両膝を細りと内端に屈めながら、忘れたらしく投げてた裾を、すつと搔込んで、草へ横坐りになると、今までの様子とは、がらりと變つて、活々とした、清い調子で、

(姉さん、この方を留めて下さい、帰しちや厭よ。)

と言うが疾いか、すつと、戸口の土間へ、青い影がちらちらし  
て、奥深く消え込んだ。

私は呆氣に取られた。

すると、姉さんと言われた、その貴婦人が、緊つた口許で、

黙つて、ただちよいと会釈をする、……これが貴下、その意味は分らぬけれども、峠の方へ行くな、と言つて……手で教えた婦人ひとでしよう。

何にも言わないだけなお気がさす。

(ええ、実は……)

と前刻さつきからの様子を饒舌しゃべつて、ついでに疑うたがいを解いこうとしたが、  
不可いけません。

(ああ、)

それ覗のぞくまでもなく、立つたままで、……今暗がりへ入った、  
も一人の後あとを軒下すかにこう透すかしながら、

(しばらくどうぞ。)

坂を上つて、アノ薄原すすきはらを潜るくぐのに、見得もなく引提ひっさげていた、——重箱の——その紫包を白い手で、羅うすものの袖へ抱え直して、片手を半開きの扉へかける、と嚴重に出来たの、何の。大巖おおいわの一枚戸のような奴がまた恐しく迂すべりが良くて、発奮はずみかかつて、がらん、からから山鳴り震動、カーンと咎こたを返すんです。ぎよつとしました。

その時です。

(どこへもいらしつちや不可いけませんよ。)

と振り返りざまに莞爾にっこり、美しいだけにその凄すこさと云つたら。高い敷居つまに棲かえも翻かえさず、裾が浮いて、これもするりと、あとは御存ひとすじじの、あの奥深い、裏口まで行抜けの、一条の長い土間が、門か

どなりかくがた  
 形角形に、縦に真暗な穴で。」

と言つた、この辺家の構は、件の長い土間に添うて、一側に座敷を並べ、鍵の手に鍵屋の店が一昔以前あつた、片側はずらりと板戸で、外は直ちに千仞の俱利伽羅谷、九十九谷の一ツに臨んで、雪の備え嚴重に、土の廊下が通うのである。

## 二十一

「今の一言に釘を刺されて、私は遁ることも出来なくなつた、：もつとも駆出すにした処で、差当りそこいら雲を踏む心持、馬場も草もふわふわらしいに、足もぐらぐらとなつていて、他愛が

ありません。止むことを得ず、暮れかかる峰の、莫大な母衣を背負つて、深い穴の気がする、その土間の奥を覗いていました。：  
ひやつ冷こい大戸の端へ手を掛けて、目ばかり出して……

その時分には、当人大童で、帽子も持物も転げ出して草隠れ、で足許が暗くなった。

遙か突当り——崖を左へ避けた離れ座敷、確か一宇別になつて根太の高いのがありました、……その障子が、薄い色硝子を嵌めたように、ぼうとこう鶏卵色になった、灯を点けたものらしい。

その障子で、姿を仕切つて、高縁から腰を下して、裾を踏落した……と思う態度で、手を伸して、私においでおいでをする。

それが、白いのだけちらちらする、する度に、

(ええ、ええ。)

と自分で言うのが、口へ出さないで、胸へばかり込上げる——その胸を一寸ずつ戸擦れに土間へ向けて斜<sup>はすか</sup>違いに糺<sup>せりだ</sup>出すんですがね、どうして、掴<sup>つか</sup>まった手は、段々堅く板戸へ喰入るばかりになって、挺<sup>てこ</sup>でも足が動きません。

またちらりと招く。

招かれても入れないから、そうやって招くのを見るのが、心苦しくなつて来たので、顔を引込<sup>ひっこ</sup>まして、門<sup>かど</sup>へ身体<sup>からだ</sup>を横づけに、腕組をして棒立ち——で、熟<sup>じつ</sup>と目を睡<sup>ねむ</sup>つて俯向<sup>うつむ</sup>いていました。

この体<sup>てい</sup>が、稀代に人間というものは、激しい中にも、のんきな



事を思います。同じ何でも、これが、もし麓ふもとだと、頬ほ被おかぶりをし  
て、礫つぶてをトンと合図をする、カタカタと……忍しのび足あしの飛石づた  
いで……………

(いらつしやいな。)

と不意に鼻さきの前で声がありました。いや、その、もの越こしの婀娜あだに  
砕けたのよりか、こっちは腰を抜かないばかり。

(はッあ。)

と言う。

(さあ、どうぞ。)

と何にも思わない調子でしたが、板戸くぎりを劃くぎりに、横顔で、こう言  
う時、ぐっと引入れるようにその瞳が動いたんです。「

「これは、どちらの御婦人で、」

と先達は、湯を注しかけた土瓶を置く。

「それを見分けるほど、その場合落着いてはいられませんでした。敷居を跨ぐ時、一つ躓いて、とつぱぐつたじき傍に、婦人が立ってたので、土間は広くつても袖が擦れて、

(これは。)

と云うと……………

(お危うございます、お気をつけ下さいまし。)

(どうもつい馴れませんので、)

と言いましたかね、考えると変な挨拶。誰がこんな処を歩行  
馴れた奴がありますか。……外から見える縁側の雨戸らしいのは、

これなんでしょう、ずツと裏庭へ出抜けるまで、心こころづも積り十八九枚、……さよう二十枚の上もありましたろうか、中ほどが一ヶ所、開いていました。——そこから土間が広くなる、左側が縁で、座敷の方へ折曲おれまがつて、続いて、三ツばかり横に小座敷が並んでいます。心覚えが、その折曲おれまがりの処まで、店口から掛けて、以前、上下の草鞋わらじ穿きが休んだ処で、それから先は車を下りた上客が、毛氈もうせんの上へあがった場処です。

余計なことを言うようですが、後あとの都合がありますから、この屋造やづくりの様子を聞いて下さい。

で座敷々々には、ずらり板縁が続いているのが薄明りで見えませんでした。それは戸外そとからも見える……崖へ向けて、雨戸を開けた処

があつたからです。

が、ちようど土間の広くなつた処で、同じ事ならもつと手前を  
開けておいてくれれば可い……入り口はいりぐちしばらくの間、おまけに  
狭い処が、隧道トンネルでしよう。……処へ、おどつてるから、ばた  
ばたとそこらへ当る。——黙つて手を曳ひいたではありませんか。」

## 二十二

「対手あいては悠々としたもので、

(蜘蛛の巣が酷ひどいのでございますよ。)

か何かで、時々歩ある行きながら、扇子……らしい、風を切つてひ

らりとするのが、怪しい鳥の羽搏つ塩梅。

これで当りはつきました。手を曳いてるのは貴婦人の方らしい、わざわざ扇子を持参で迎いにしようとは思われませんかから。

果して、そうでした。雨戸の開けてある、広土間の処で、円

鬚げが古い柱の艶つやに映った。外は八重葎やえむぐらで、ズツと崖です。崖

にはむらむらと靄もやが立つて、廂ひあわい合から星が、……いや、目の光

り、敷居の上へ頬杖ほおづえを置いて、臺ひきがえのぞが覗いていそう。婦人おんながま

た蒼黄色あおぎいろになりはしないか、と密そつと横目で見ましたがね。襲かさねを

透いた空色の緞ろの色ばかり、すつきりして、黄昏たそがれの羅うすものはさなが

ら幻。そう云う自分とは云うと、まるで裾から煙のようです。途

端に横手の縁を、すつと通つた人氣勢ひとけはいがある。ああ、白脛しらはぎが、

と目に映る、ともう暗い処へ入った。

向うの、離座敷の障子の棧が、ぼんやりと風のない燈火ともしびに描かれる。——そこへ行く背戸は、浅茅生あさぢろうで、はらはらと足の甲へ露が落ちた。

(さあ、こちらへ。)

ここで手を離して、沓脱くつぬぎの石に熊笹の生え被かぶつた傍わきへ、自分を開いて教えました。障子は両方へ開けてあつた。ここの沓脱を踏みながら、小手招こてまねきをしたのでしよう。

(上りましても差支えはございませんか。)

とその期ごに及んで、まだ煮切らない事を私が言うのと、

あるじ(主人がお宿をいたします。お宅同様、どうぞお寛くつろぎ下さいまし

。

と先へ廻つて、こう覗のぞき込むようにして袴しとねを直した。四畳半で、腰を曲げて乗出すと、縁越に手が届くんですね。

(ともかく御免を、)

高縁へ腰を蹂にじつて、爪つまさき尖下りに草鞋わらじの足を、左の膝へ凭もたせ掛けると、目敏めざとく貴婦人が氣を着けて、

(ああ、お濯すすぎ遊あそばしましょうね。)

と二坪ばかりの浅茅生あさかきを斜はすに切つて、土間口をこつちから、

(お綾あやさん——)

と呼びます。

(ああ、もしもし。)

私は草鞋を解きながら、

（乾いた道で、この足袋がございます。よく払けば、何、汚れは  
しません。お手数は恐れ入ります、どうぞ御無用に……しかしお  
座敷へ上りますのに、）

と心着くと、無雑作で、

（いいえ、もう御覧の通り、土間も同一でございますもの、そん  
な事なぞ、ちつともお厭いには及びませんの。）

と云いかけて莞爾して、

（まあ、土間も同一だつて、お綾さんが聞いたら何ほでも怒るで  
しょう。……人様のお住居を、失礼な。これでもね、大事なお客  
様に、と云つて自分の部屋を明渡したんでございますよ。）



いかにも、この別亭はなれが住居すまいらしい。どこを見ても空屋同然な中に、ここばかりは障子にも破れが見えず、門口に居た時も、戸を繰り開ける音も響こかなかつた。

そこで、ちと低声こごえになつて、

(あなた貴女は……此家ここの……ではおあんなさいませぬのですか。)

(は、私もお客ですよ。——不行届いりきでございますから、事に因りますと、お合宿あいやどを願うかも知れませんが、御迷惑でござんしやうね。)

とちよいと煽あおいだ、女扇子おんなおうぎに口許くちもとを隠したものです。」

「成程、どうも。」

山伏は髻ひげだらけな頬を撫でる。

「私は、黙つて懐中ふところを探しました。さあ、慌てたのは、手拭てぬぐい、  
蝦蟇がまぐち口、皆無みんない。さまでとも思わなかつたに、余程顛動てんどうしたら  
しい。門かどへ振落して来たでしょう。事ここに及んで、旅費などを  
論ずる場合か、それは覚悟しましたが、差当り困つたのは、お約  
束はたの足を払く……」

## 二十三

「……様子で手拭が無いと見ると、スツと畳んで、扇を胸高な帯  
に挟んで、袂たもとを引いたが、長襦袢ながじゆばんの端と一所に、涼しい手巾ハンケチを  
出したんですね。

崖へ向いた後姿、すぐに浅茅生あさぢろうへ帯腰を細く曲げたと思うと、さらさらと水が聞えた。——臃おぼろの清水と云うんですか、草がくれで気が着かなかつた、……むしろそれより、この貴婦人に神通があつて、露を集めた小流こながれらしい。

(これで、貴下あなた、)

と渡す——笥かけひがそこにあるのであつたら、手数てかずは掛けないでも洗つたものを、と思ひながら思ったように口へは出ないで、黙だんまりで、恐入つたんですが、柔やわらかく絹かが搦からんで、水色に足の透いた処は、玉を踏んで洗うようです。

(さあ、お寄越しなさいまし。)

と美しい濡れた手を出す。

(ちよいと濯そそぎましょう。)

遮ると、叱るように、

(何ですね、跣足はだしでお出なすつては、また汚れるではありませんか。)

で恐縮なのは、そのままを手を拭ふいて、

(後で洗いますよ。 )と丸まるげて落した。手巾ハンケチは草の中。何の、

後で洗うまでには、蛇が来て抱くか、山やまが接吻キッスをしよう、とそこいらをみまわしましたが、おっかなびつくり。

(姉さん。)

(ああ、)

(ちよいと。……)

土間口の優しい声が、貴婦人を暗がりへ呼込んだ。が、二ツ三ツ何か言交わすと、両手に白いものを載せて出た——浴衣でした。余り人間離れがしますから、浅葱あさぎの麻の葉絞りで絹きぬ縮ちぢみらしい扱帯しごきは、平ひらにあやまりましたが、寝衣ねまきに着換えろ、とあるから、思切つて素す裸ぼだかになつて引掛ひっかけたんです。女もので袖が長い——洗つたばかりだからとは言われたが、どこかヒヤヒヤと頸えりもと元もとから身に染む白粉おしろいの、時めく匂においで。

またぼうとなつて、居心いごころが据すわらず、四畳半を燈火ともしびの前まえうし後ろ、障子よしかかに凭懸よりかかると、透間とおまからふつと蛇へびの臭においが来こそううで、驚おどろいて摺ずつて出る。壁際くわつに附着くつけば、上うへから蜘蛛くもがすつと下りくだりそうで、天窓あたまを窺すくめて、ぐるりと居直まる……真中まんなかに据まえた座蒲団ざぶとんの

友染ゆうぜん模様もようが、桔梗ききようがあつて薄すすきがすらすら、地ちが萌黄もえぎの薄うすい処ところ、  
おもて戸外の猿さるヶ馬場ばばそつくりといふのを、ずつと避けて、ぐるぐる廻  
 りは、早や我ながら独りでぐでんに酔つたようで、座敷ざしきが揺れる、  
 障子しょうじが動く、目が廻る。ぐたりと手を支つく、や、またぐたりと手  
 を支く。

これじゃならん、と居坐居いずまいを直して、キチンとすると、搔合かきあわ  
 せる浴衣ゆいを……潜くぐつて触る自分の身体からだが、何となく、するりと女に  
よしやう性せいのようで、ぶるツとして、つい、と腕を出して、つくづく  
 と視ながめる始朱ししゆ。さ、こうなると、愚にもつかぬ、この長い袖そでの底  
 には、針はりのようを褐かばいろ色の毛けがうじゃうじゃ……で、背中からむ  
 ずつきはじめる。

もつとも、今浴衣を持って来て、

(私もちよいと失礼をいたしますよ。)

で、貴婦人は母屋へ入った——当分離座敷に一人の段取で。

その内に、床の間へ目が着きますとね、掛地がない。掛地なし

で、柱の掛花活かけはないけに、燈火あかりには黒く見えた、鬼薊おにあざみが投込んで

ある。怪けしからん好みでしょう、……がそれはまだ可いい。傍わきの袋

戸棚と板床の隅くつつに附着くつつけて、桐の中ちゆうぶる古ふるの本箱みつつが三箇、どれも

揃むこうつて、彼方向むこうきに、蓋ふたの方をぴたりと壁おつつに押着けたんです。：

…

「はあ、」

とばかりで、山伏は膝の上で手を拵こしらへた。

「昔しゆぎ修行ようじや者が、こんな孤家ひとつやに、行暮ゆきくれて、宿を借ると、承な塵げしにかけた、槍やり一筋で、主人あるじの由緒よしが分ろうという処。本箱は、やや意を強うするに足ると思うと、その彼方むこう向けの不開あかずの蓋で、またしても眉ひそを顰ひそめずにはいられませんのに、押並べて小机があった。は可懐なつかしいが、どうです——その机の上に、いつの間に据えたか、私のその、蝦蟇がまぐち口と手拭てぬぐいが、ちゃんと揃えて載せてあるのではありませんか、お先達。」

と境は居直る。

## 二十四



「背後うしろは峰みねで、横よこは谷やです。峰みねも、洞どうの窪なかくぼんだ、頭かしらがざんばらの栗栗の林やしで蔽おほい被かぶさつていようというんで、それこそ猿さるが宙ちゆう返へんりでもしなければ上あれそうにもなし、一方いっぺん口くちはその長なが土つち間までしょう、——今更いま遁にげ出だそうツたつて隙すきがあるんじやなし、また遁にげげようと思おもったのでもないが、さあ、静じつとしていられないから、手近てぢかの障さや子こをがたりと勢いきおいよく開ひらけました。……何か命いのち令れいをされたようので、自分きま気ま儘ままには、戸こ一枚まいも勝手かたてを遣やつては相成あひならんような気がしていたのでありますけれども……

すると貴下あなた、何なにとその横縁よこえに、これもまた吃驚びっくりだ。私のいかなむぎ麦むぎ藁わら帽ぼうから、洋傘こうもり、小さな手荷物てにものね。」

「やあやあ、」

「それに、あなた貴下が打棄うつちやつておいでなすつたと聞きました、その  
こんごうづえ金剛杖まで、ひとそろい揃、驚いたもの目には、何か面つらあて当らし  
 く飾りつけたもののように置いてある。……」

山伏ぐんなりして、

「いやもう、凡慮の及ぶ処でござらん。黙つて承りましょう、そ  
 こで？」

「処へ、母屋からあしおと跫音が響いて来て、あさぢう浅茅生をさつきつ颯々、くつぬぎ沓脚  
 で、カタリと留やむと、所在うしろ紛らし、谷の上の靄もやを視ながめて縁に立っ  
 た、私の直ぐ背後で、衣きぬず摺れが、はらりとする。

小さな咳しわぶきして、

(今に月が出ますと、ちつとは眺望ながめになりますよ。)

と声を掛けます。はて違うぞ、と上から覗くように振向く。下に居て、そこへ、茶盆を直した処、俯向いた襟足が、すつきりと、髪あおがいずりの濃いのに、青貝摺あおがいずりの櫛きさらが晃めく、鬢びんも撫なでつけたらしいが、まだ、はらはらする、帯はお太鼓にきちんと極きまった、小取廻こどりまわしの姿の好きよ。よろけ縞しまの明石あかしを透あいて、肩せなから背せながふつくりと白あかった——若い方の婦人おんななんです。

お馴染なじみの貴婦人だとばかり、不意くを喰くらつて、

(いらつしやい。)

と調子を外ことずして、馬鹿ばかな言ことを、と思つたが、仕方なしに笑わきました。で、照てれかく隠かくしに勢いきおいよく煙草たばこ盆ぼんの前まへへ坐まる……

(お邪魔まじまじに出でましてござごいます。)

莞爾にっこりして顔を上げた、そのぼつちりしたのをやや細く、まぶた瞼をほんのりさして、片手ついたなりに顔を上げた美しさには、何にもかも忘れましました。

(とんでもない。)

と突つんのめるように巻煙草を火入ひいれに入れたが、トツチていて吸いつきますまい。

(お火が消えましたかしら。)

とちよつと翳かざした、火入れは欠けて燻くすぶつたのに、自然じねん木ぼくをくりぬき抉く抜の煙草盆。なかんずく灰吹はいふきの目覚しきは、……およそ六貫目掛がけたけのこの筍たけのこほどあつて、縁へりの刻々さざくらになつた代物、先代の茶店が戸棚の隅に置忘れたものらしい。

何の、火は赤々とあつて、白魚しらおに花が散りそうでした。

やっと煙けむのような煙けむりを吸つたが、どうやら吐掛けそうで恐縮で、

開けた障子の方へ吹出したもんです。その煙がふつと飛んで、裏の峰から一ひと風おろし颯さつと吹込む。

と胸をずらして、燈あかりを片隅に押ししましたが、灯が映るか、目のふちの紅くれないは薄らうすがぬ。で、すつと吸うように肩を細めて、

（おお、涼しい。お月様の音ですかね、月の出には颯さつといつてきつと峰から吹きますよ。あれ、御覧なさいまし。）

と燈あかりを背せに、縁の端へ仰向あおむいた顔で恍惚うつとりする。

（栗の林へ鵲かささぎの橋かかが懸かりました。お月様はあれを渡つて出なさいます。いまに峰を離れますとね、谷の雲が晃きら々きらと、銀のような

波になって、兔の飛ぶのが見えますよ。）

（ほとんど仙せんきよう境。）

と私は手を支ついて摺ずって出ました。

（まるで、人間界を離れていますね。）

……お先達、私のこう言ったのはどうです。」

急に問われて、山伏は、

「ははあ、」

と言う。

「驚駭おどろきに馴なれて、いくらか度胸も出来たと見え、内々ふう諷する心持もあつたんですね。

直ぐには答えないで、手捌てさばきよく茶を注ついで、  
ひど粗いんですよ。」

と言う、自分の湯呑ゆのみで、いかにも客の分といつては茶碗一つ無いらしい。いや、粗いどころか冥みよう加至極。も一つ唐草からくさの透すかし模様の、硝子ピイドロの水呑が俯うつむ向けに出ている、

（お暑いんですから、冷水おひやがお宜よろしいかも知れません。それだと直きそこに綺麗なのが湧わいていますけれども、こんな時節には蛇が来て身体からだを冷ひやすと申ましますから。……）

この様子では飲料のみもので吐血とけつをしそうにも思われぬから、一息

に煽あおりました。実はげつそりと腹も空いて。

それを見ながら今の続きを、……

(ほんとに心細いんですわ。もう、おっしやいます通り、こんな山の中で、幾いくか日も何日もないようですが、確か、あの十三四日の月夜ですね、里では、お盆でしょう。——そこいらの谷の底の方に、どうやら、それらしい燈籠とうろうの灯が、昨夜幽ゆうがすかに見えましたわ……ぽっちりよ。)

と蓮葉はすはに云ったが、

(蛍あせくらいに。)

そのままでもなく、こう崖へかけて俯向うつむき加減に、雪の手を翳かざした時は、言うばかりない品が備わって、気高い程に



見えました。

(どんなに、可懐なつかしゆうござんしたでしよう。)

たちまちしお悄れて涙ぐむように、口許が引しまった。

見ると堪たまらなくなつて、

(そのかわり、また、里から眺めて、自然こうやつてお縁側でも開いていて、フトこの燈とも火しびが見えましたら、どんなにか神こう々こうしい、天上の御殿のように思われましょう。)

なぜ山住居やまずまいをせらるる、と聞く間もなしに慰めたんです。

あどけなく頭かぶりを振つて、

(いいえ、何の、どこか松こずえの梢こずえに消え残りしました、寂さみしい高燈たかとう籠ろうのように見えますよ。里のお墓には、お隣りもお向うもあり

ますけれど、ここには私ひとりきり唯一人。ひとりきり）

小指を反らして、爪つまさき尖を凝じつと見て、

（ほんとに貴下あなた、心細い。蓮はすうてなの台に乗ったって一人切ひとりぼっちでは寂さみし

いんですのに、おまけにここは地獄ですもの。）

（地獄。）

と言つて聞返しましたがね、分別もなしに、さてはと思つた。

それ、貴下あなたの一件です。」

「鬼の面、鬼の面。」

と山伏は頭を搔く。

「ところが違います。私もてつきり……だろうと思つて、

（貴女あなた、唐突だしぬけですが、昼間変なもの姿を見て、それで、厭いやな、

そんな忌<sup>いま</sup>わしい事をおつしやるんじゃないか、きつとそう  
 でしよう。）

に極<sup>き</sup>めてかかつて、

（御心配はありません。あれは、麓<sup>ふもと</sup>の山伏が……）

ツて、ここで貴下の話をしました。

ついては、ちつと繕<sup>つくろ</sup>つて、まあ、穏<sup>おだ</sup>かに、里で言う峠<sup>うわさ</sup>の風説――

――面と向っているんですから、そう明<sup>あからさま</sup>白にも言えませんでした

たが、でも峠を越すものの煩うぐらいの事は言った。で、承<sup>うけた</sup>つた

通り、現にこの間も、これこれと、向う顛<sup>はちまき</sup>卷の豪傑が引<sup>ひ</sup>転か

えつたなぞは、対<sup>あいて</sup>手の急所だ、と思つて、饒<sup>しやべ</sup>舌<sup>した</sup>つたには饒舌<sup>しやべ</sup>りま

したが、……自若<sup>しじやく</sup>としている。」

「自若として、」

「それは実に澄ましたものです。ひきがえる 蟄いたちが出て、いきち 鼯いきちの生血を吸つたと言つても、ほほえ 微笑ほほえんでばかりいるじやありませんか。早く安心がしたくもあるし、こつちは急あせつて、

(なぜまたこんな処にお一人で。)

と思ひ切つて胸を据えると、にっこり 莞爾にっこりして、

(だって、やまあり 山蟻やまありの附くつつ着くつついた身体からだですもの。)

と肩をぶるぶると震わしてしつかりと抱いた、胸に夕顔の花がまたほのめく。……ああ、魂というものは、あんな色か、と婦おんなに

玉の緒を取つて扱しごかれたように、私がふらふらとした時、

(あなた 貴下あなた、)

と顔を上げて、凝じつとまた見ました。」

二十六

「色めいた媚なまめかしさ、弱々と優しく、直ぐに男の腕へ入りそうに、怪しい翼を搔かい窺すくめて誘込むといった形。情に堪えないで、そのまま抱だき緊めでもしようものなら、立たち処どころにぱツと羽搏はばたきを打つ……たちまち蛇が寸断すたすたになるんだ。何のその術てを食うものか、とぐつと落着いて張合った気で見れば、余りしおらしいのが癩しやくに障った。

が、それは自分勝手に、対手さきが色仕掛けにする……いや、して

くれる……と思つた、こつちが大の自惚うぬぼれ……

もつての外です。

実は、涙をもつて、あわれに、最惜いとおしく、その胸を抱いて様子を見るべき筈はずで。やがてまた、物凄ものすごさ恐しさに、戦おのき戦き、その膚はだを見ねばならんのでした。」——

と語りかけて、なぜか三造は歎息した。

山伏は茶盆を突退つきのけて、釜かまの此方こなたへ乗つて出て、

「自惚でない。承つた、その様子、怪けしからん嬌媚きょうびの体ていじや。

さようなことをいたいて、少わかい方の魂たまを蕩とろかすわ、ふん、ふふん

、  
「

と頻しきりに頷うなずきながら、

「そこでその、白い乳房でも露あらわしたでござるか。」

「いいえ。」

「いずれ、鳩みずおち尾うろこに鱗が三枚……」

黙って三造は頭かぶりを掉ふる。

「全体蛇じやたい体でござるかな。」

「いいえ。」

「しからば一面の黒子ほくろかな、何にいたせ、その膚を、その場でも  
つて……」

「見ました、見ましたが、それは寝てからです。」

「寝て……からはなお怪しからん。これは大変。」

と引ひつつか搦いざんで膝去り出した、煙草入れ押戻しさまに、たじたじ

となつて、摺ずり下さがつて、

「はッはッ、それまで承つては、山伏も恐入る。あのその羅うすものを透くと聞きましたただけでも美しさが思い遣やられる。寝てから膚を見たは慄然ぞつとする……もう目前めさきへちらつく、独ひとりの時なら鐸すずを振つて怨敵退散おんてきたいさんと念ずる処じや。」

「聞きようが悪い、お先達。私が一ツ部屋にでも臥ふせつたように、」  
「違いますか。」

「飛んだ事を！」  
と強く言つた。

「はてな。」

おんな  
「婦おんなたちは母屋に寝て、私は浅芽生あさぢうの背戸を離れた、その座敷に



泊ったんです。別々にも、何にも、まるで長土間が半町あります。」

「またそれで、どうして貴<sup>あなた</sup>辺は？」

「そうです……お聞<sup>のぞ</sup>苦しかろうが、覗いたんです。」

「お覗きなすった？いずれから。」

「長土間を伝って行って、母屋の一室<sup>ひとま</sup>を<sup>ねや</sup>閨にした、その二人の蚊

帳を、……

というのが——一人で離座敷に寝たには寝たが、どうしても静<sup>じつ</sup>と枕をしている事が出来なくなってしまうたんですね。」

「山伏でも寝にくいので、御無理はない、迷いじやな。」

「迷……迷いは迷いでしょうが、色の、恋のというのじゃありま

せん。これは言訳でも何でも無い、色恋ならまだしもですが、まったくは、何とも気味の悪い恐い事が出来たんです。」

「はあ、蚊帳を抱く大入道、夜中に山霧が這はい込んで、目をまわすほど怯おびかされる、よくあるやつじゃ。」

「いや、蚊帳は釣らないで臥ふせりました。——母屋の方はそうも行かんが、清水があつて、風通しの可いいせいか、離座敷には蚊は居ません。で、ちと薄ら寒いくらいだから——つて……敷くのを二枚と小搔こが巻いまき。どれも藍縞あいしまの郡内絹ぐんないぎぬ、もちろんお綾さん、と言いました、少わかい人の夜のもの……そのかわり蚊帳は差上げません。——

(ちと美しい唇に、分けてお遣んなさいまし。……殿方の血は、

殿方ばかりのものじやありませんよ。(

と凄<sup>すご</sup>いような串<sup>じょうだん</sup>戯<sup>ご</sup>を、これは貴婦人の方が言つて。——辞

退したが肯<sup>き</sup>かないで、床の間の傍<sup>わき</sup>の押入から、私の床を出して敷いたあとを、一人が蚊帳を、一人が絹の四布蒲団<sup>よのぶとん</sup>を、明石と紹<sup>ろちり</sup>縮緬<sup>めん</sup>の裳<sup>もすそ</sup>に搦<sup>から</sup>めて、蹴<sup>けだしづま</sup>出<sup>だ</sup>棲<sup>しづま</sup>の朱鷺<sup>ときいろ</sup>色、水色、はらはらと白<sup>しろは</sup>脛<sup>ぎ</sup>も透<sup>か</sup>いて重<sup>かさ</sup>つて正屋<sup>おもや</sup>へ隠れた、その後<sup>あと</sup>の事なんですが。」

二十七

「二人の婦<sup>おんな</sup>が、その姿で、沓<sup>くつぬぎ</sup>脱<sup>だ</sup>の笹<sup>ささ</sup>を擦<sup>つ</sup>る棲<sup>しま</sup>はずれ尋常<sup>じんじょう</sup>に、前の浅芽<sup>あさぢう</sup>生に出た空には、銀<sup>あまのがわ</sup>河<sup>がわ</sup>が颯<sup>さつ</sup>と流れて、草が青う浮出し

そうな月でしょう——蚊帳釣草かやつりぐさにも、蓼たでの葉にも、萌黄もえぎ、藍あい、紅こ  
うあさ麻の絹の影が射さして、銀しろがねの色紙しきしに山神さんじんのお花畑を描いたよう  
 な、そのままそこをねや闇ぬいとりにしたら、月の光が暈ぬいとりの目、寝姿に白露の  
 刺ぬいとり繡ぬいとりが出来そうで、障子をこつちで閉めてからも、しばらく幻  
 が消えませんが。

が、二人はもう暗い母屋へ入ったんです。と、草清水くさしみずの音が  
 さらにさらりと聞え出す、それが、抱いた蚊帳と、掛蒲団かかぶたんが、狭い土  
 間を雨戸あまどに触つて、どこまでも、ずツと遠くへ行くゆくのが、響くか  
 と思われる。……

ところで、いつでも用あり次第ゆきか、往通ゆきかいの出来るようにと、  
 ……一体土間のその口にも扉かどがついている。そこと、それから斜違はすか

いに向い合つた沓脱の上の雨戸一枚は、閉めないで、障子ばかり。あとは辻堂のような、ぐるりとある廻縁まわりえん、残らず雨戸が繰つてあつた。

さて、寝る段になつて、そのすつと軽く敷いた床を見ると、まるで、花で織つた羅うすもののようでもあるし、虹にじで染めた蜘蛛の巣のようにも見える――

ずかゆりおこと無遠慮には踏込み兼ねて、誰か内端うちわに引被ひっかついで寝た処を揺起ゆりおこすといつた体裁……

枕許まくらごに坐つて、密そつと搔卷かいまきの襟へ手を懸けると、冷つめたかつた。が、底かすかに温味あたたかのある気がしてなりません。

また気のせいでは、どうやら、こう、すやすやと花が夜露を吸う

寢息が聞える。可訝おかしく、天鷲絨びろうどの襟もふつくり高い。

や、開けると、あの顔、——寝乱れた白い胸に、山蟻わかがぽつちり黒いぞ、と思うと、なぜか、この夜具へ寝るのは、少い主婦あるじの懐中へ入るようで、心こころ咎とががしてならないので、しばらく考えていましたかね。

そうでもない、またどんな事で、母屋から出て来ないと限らん。誰か見るとこの体ていは、蓋ふたを壁にした本箱なり、押入なり、秘密の鍵かぎを盗もう、とするらしく思われよう。心苦しいと思つて、思い切つて、搔卷の袖を上げると、キラリと光つたものがある。

鱗うろこか、金の、と総毛立つ——と櫛くしでした。いつ取落したか、青貝あ摺おがので、しかも直ぐ襟えり許もとに落ちていました。

待て、女の櫛は、誰も居ない夜具の中に入っていると、すやすやと寝息をするものか、と考えたくらい、もうそれほど事には驚かず、あたりまえ当然のようだったのも、気がどうかしていたんでしよう。

しばらく手に取って視ながめていましたが、

(ええ、縁えんきり切だ！)

とちと氣勢きおつて、ヤケ気味に床の間へ投出すと、カチリという。折れたか、と吃びっくり驚して、拾い直して、密そっと机に乗せた時、いささか、蝦蟆がまぐち口の、これで復ふくしゅう讎が出来たらしく、大おおに男性の意気を発して、

(どうするものか！)

ぐつと潜つて、

(何でも来い。)

で枕を外して、大の字になった、……は可いが、踏伸ばした脚を、直ぐに意気地なく、徐々そろそろ縮め掛けたのは……

ぎやつ！

あれは五位鷺ごいさぎでしような。」

「ええ。」

「それとも時鳥ほととぎすかも知れませんが、ぎやつ！ と啼なきます…

…

可厭いやな声で。はじめ、一声、二声は、横手の崖みちみに満充もちみちた靄もやの底の方に響きました。虚空へ上つて、ぎやつと啼くかと思うと、



直ぐにまたぎやつと来る。

ちようど谷底から、一軒家を、環わに飛び廻まわっているようです。

幾羽も居るんなら居るで可いが、何だか、その声が、同おんなじ一つ鳥のらしいので、変に心地が悪いのです。……およそ三四十度、声たびが聞えたでしょうか。

枕まくらもと頭あたまで、ウーンと呻うめ吟いんくのが響こき出した、その声が、何とも言われぬ……」

二十八

「寝てから多しばらく時た経たつ。これは昼間からの気疲れに、自分のうな魔まさ

れる声が、自然と耳に入るのじやないか。

それも思ったが、しかしやつぱり聞える。聞えるからには、自分でないのは確たしかでしょう。

またどうも呻うめ吟くのが、魘おなじされるのとは様子が違つて、苦くるしもがみくといった調子だ……さ、その同一苦おなじみくというにも、種いろいろ々あります。訳は分らず、しかもその苦くるしみ悩なやみが容易じやない。今にも息を引取るか、なぶり殺しに切刻きざまれてでもいそうです。」

「やあやあ、どちらの御婦人です。」

「いや、男の声。不思議にも怪しいにも、婦人おんななら母屋の方に縁はあるが、まさしく男なんですものね。」

「男の声かな、ええ、それは大変。生血を吸われる夥おな間かまらしい、

南無三、そこで？」  
なむさん

「何しろどこだ知らん。薄気味悪さに、頭を擡げて、熟と聞くと  
 ……やっぱり、ウーと呻吟る、それが枕許のその本箱の中らしい  
 。」

「本箱の？」

「一体、向うへ向けたのが気になったんだが、それにしても本箱  
 の中は可訝い、とよくよく聞き澄しても、間違いでないばかりか、  
 今度は何です、なお困ったのは、その声が一人でない、二人——  
 三人——三個の本箱、どれもこれも唸っている。」

ウーウーウーという続けさまのは、厭な内にもまだしも穏かな  
 方で、時々、ヒイツと悲鳴を上げる、キャツと叫ぶ、ダアーと云

う。突刺された、斬きられた、焼かれた、と、秒を切つて劃くぎりのつくだけ、一々ドキリドキリと胸へ来ます。

私はむつくり起直つた。

ああ、硫黄いおうの臭においもせず、蒼あおい火も吹出さず、大釜おおがまに湯玉の散

るのも聞えはしないが、こんな山には、ともすると地獄谷というのがあつて、阿鼻叫喚あびきようかんが風の繞めぐるごとくに響くと聞く……さて

は……少わかい女さつきが先刻——

(ここは地獄ですもの。)

と言つたのも、この悪名所を意味するのか。……キヤツと叫ぶ、ヒイと泣く、それ、貫かれた、抉えぐられた……ウ、ウ、ウーンと、引入れられそうに呻うめ吟く。

とても堪らん<sup>たま</sup>。

気のせいで、浅茅生を、縁<sup>えん</sup>近<sup>ぢか</sup>に湧<sup>わ</sup>出<sup>き</sup>る水の月の雫<sup>しずく</sup>が点<sup>した</sup>滴<sup>た</sup>るか、と快く聞えたのが、どくどく脈を切つて、そこらへ血が流れていそうになつた。

さあ、もう本箱の中ばかりじゃない、縁の下でも呻吟けば、天井でも呻吟く。縁側でも呻<sup>う</sup>唸<sup>な</sup>り出す——数<sup>すひやく</sup>百の虫が一<sup>いつ</sup>斉<sup>とき</sup>に離座敷を引包んだようでしょう、……これで、どさりと音でもすると、天井から血みどろの片腕が落ちるか、ひしやげた胴腹が、畳の合<sup>あ</sup>目<sup>め</sup>から溢<sup>は</sup>み<sup>み</sup>だ<sup>だ</sup>そう。

幸い前の縁の雨戸一枚、障子ばかりを隔てにして、向うの長土間へ通ずる処——その一方だけは可<sup>い</sup>厭<sup>や</sup>な声がまだ憑<sup>とり</sup>着<sup>つ</sup>きません。

おお！ 事ある時は、それから母屋へ遁げよ、という、ひとすじ一条の活路なのかも料はかられん。……

お先達、」

と大息ついて、

「……こう私が考えたには、所説いわれがあります。……それは、お話は前後したが、その何の時でした。——先刻さつき、——

（だって、山蟻の附着くつつしてる身体からだですもの。）

で、すっかり魂を抱取られて、私がトボンとした、と……申しましたな。——そこへ、

（お綾さん、これなのかい。）

と声を掛けて、貴婦人が、衝と入って来たのでした。……片手に、あの、蒔絵まきえものの包つつみを提げて、片手にちいさに小さな盆ひとつを一個。それに台のスツと細い、浅くてぱツと口の開いた、ひどくハイカラな硝コ子盃ツブを伏せて、真緑まみどりで透通る、美しい液体の入った、共口の壺びんが添って、——三分ぐらい上が透いていたのでしたつけ。

(ああ、それなの、憚はばかりさま。)

と少わかいのが言うのと、

(手の着かないのは無いようね。)

と緑の露の映る手で、ずツと私の前へ直しました。酒なんですね。

(手が着いたって、姉ねえさん、食べかけではないわ、お酒ですもの

綺麗な歯をちらりと見せたもんですね。その時、

## 二十九

「貴婦人も莞爾にっこりして、

（ま、そうね、私はちつとも頂かないものだから。）

（あら人聞きが悪いわ。私ばかりお酒を飲むようで。）

（だってそれに違いないんですもの、ほんとに困った人だこと。）

ちよいとたしな賤めるような目をした。二人で仲よく争いながら、硝子コップ盃を取って指しました。



（さあ、お一つ召上れな、お綾さんの食べかけではないそうですから……しかしお甘いんで不可いませんか。）

と貴婦人が言つた時は、もう少わかい方が壇びんを持つて待つてるんでしよう。手首へ掛けて蒼あおい酒に、颯さつと月影が射さしたんです。

毒虫を絞つた汁にもせよ、人生れて男にして、これは辞すべきでない。

ひっか引掛けて受けました。

薫かおりと酔よが、ほんのりと五臟六腑ごぞうろつぷへ染しみ渡る。ところで大だい胆たんに

その盃さかずきを、少わかい女に返しますとね、半分ばかり貴婦人に注ついでも

らつて、袖を膝のに載のせながら、少し横向きになつて、カチリと皓し

齒うはの音がした、目を瞑ねむつて飲んだんです。

(姉さんは。)

(いいえ、沢山、私は卑いやしいようなけれども、どうも大変にお肚なかが空いたよ。)

とお肴兼帯さかな——怪しげな膳ぜんよりは、と云つて紫の風呂敷を開いた上へ、蒔絵の蓋ふたを隙すかしてあつた。そのお持たせの鮎あゆの鮨すしを、銀の振出しの箸はしで取つて撮つまんだでしょう。

(お茶を注さして来ましようね。)

と吸子きゆうすを取つて、沓脱くつぬぎを、向うむきに片褌かたづまを蹴落けおとしながら、美しい眉を開いて、

(二人で置くは心配ね。)

と斜めになつて袖を噛かむと、鬢びんずらの戦そよぎに連立つて、袂たもとの尖さきがす

つと折れる。

貴婦人が畳に手を支つき、

(お盃をしたのは貴女あなたでしょう。)

(ですから、なおの事。)

と言い棄りてて袂くわを啣くわえたまま蓮葉はすはに出でました。

私もうは となつた。

が、ここだ、と一ひとつ番、三さん盃ばいの酔よいいの元もと気で、拝借はいせきの、その、女

の浴衣ゆいの、袖そでを二に三さん度、両方りょうほうへ引張ひきちがり引張ひきちがり、ぐぐつと膝ひざを突つ向むけ

て、

(夫おくさん人。 )と遣やつた――

(生命いのちに別条べつじょうはありませんでししょうな。 )

卑劣なことを、この場合、あたかも大言壮語するごとく浴あびせたんです。

笑うか、打ぶつか、呆れるか、と思うと、案外、正面から私を視みて、

(ええ、その御心配のござんせんように、工夫をしておりますんです。)

と判きつぱり然きつぱり言う。その威儀が正しくつて、月に背けた顔が蒼あおく、なぜか目の色が光るようで、羅うすものしまの縞しまもきりりと堅く引ひき緊しまつて、くつきり黒くなつたのに、悚ぞつと然ぞつとすると、身震みふるいがして酔さが醒さめた。

(ええ！)

しばらくして、私は両手を支つかないばかりに、

(申訳がありません。)

でもって恐入ったは、この人こそ、坂口で手を掉ふつて、戻れ、と留めてくれたそれでしょう。

(どうぞ、無事に帰宅の出来ますように、御心配を願います、どうぞ。)

と方かたなしに頭つむりを下げた。

(さあ。)

と大事に居直つて、

(それですから、心配をしますんですよ。今の、あのお盃を固めの御祝儀に遊ばして、もうどこへもいらつしやらないで、お綾さんと一所に、ここにお住い下さるなら、ちつともお障りはありま

せんけれど、それは、貴下あなたお厭いやでしょう。）

私は目ばかり働いた。

（ですが、あの通り美しいのに、貴下ねがにお願がいがあると云つて、衣き物ものも着換えてお給仕に出ました心は、しおらしいではありませんか。私が貴下いならもう、一も二もないけれど……山の中は不可いませんか、お可い厭やらしいのねえ。）

と歎息をされたのには、私もと胸むねを吐つきました。……」

三十

「ちよいと二人とも言ことばが途絶えた。

（ですがね、あなた貴下、無理にも発程たつしてお帰り遊ばそうとするのは――

それはお考えものなんですよ。……ああ、綾さんが見えました

）

と居座いずまいを開いて、庭を見ながら、

（よく、お考えなさいまし、私どもも、何とか心配をいたします

）

話は切れたんです、少いわか人が、いそいそ入って来ましたから。

……

ところで、俯向うつむいていた顔を上げて、それとなく二人を見較べ

ると、私には敵かたきらしい少いわか人の方が、優しく花やかで、口を利か

れても、とろりとなる。味方らしい年上の方が、対向さしむかいになる

と、凄<sup>すご</sup>いようで、おのずから五体が緊<sup>しま</sup>る、が、ここが、ものの甘さと苦さで、甘い方が毒は順当。

まあ、それまでですが、私の身に附いて心配をしますと云ったのに、私<sup>わたくし</sup>ども二人して、と確<sup>たしか</sup>に言った。

すると、……二人とも味方なのか、それとも敵<sup>かたき</sup>なのか、どれが鬼で、いずれが菩薩<sup>ぼさつ</sup>か、ちつとも分りません。

分らずじまいに、三人で鮓<sup>すし</sup>を食べた。茶話に山吹も出れば、巴も出る、俱利伽羅の宮の石段の数から、その境内の五色<sup>ごしきこいし</sup>の礫、  
|| 月かなし || という芭蕉<sup>ばしやう</sup>の碑などで持切つて、二人の身の上  
に就いては何も言わず、またこつちから聞く場合でもなかつたら、それなりにしましたが、ただふと氣<sup>とま</sup>に留つた事があります。



わか  
少い女が持出した、金蒔絵きんまきえの大形の見事な食籠じきろう……形がたの菓  
子器ですがね。中には加賀の名物と言う、紅白の墨形すみがたの落雁らくがん  
が入れてありました。ところで、蓋ふたから身をかけて、一面に蒔まい  
た秋草が実に見事で、塗ぬりも時代も分らない私だけでも、精巧さ  
はそれだけでも見惚みとれるばかりだったのに、もう落雁の数が少な  
く、三人が一ツずつで空からになると、その底に、何にもない漆うるしの中  
へ、一ツ、銀で置いた松虫がスーイと髯ひげを立てた、羽のひだも風  
を誘つて、今にもりんりんと鳴出しそうで、余り佳いいから、あつ、  
と賞ほめると、貴婦人が、ついた風で、

(これは、お綾さんのお父とつさんが。この重箱の蒔絵もやつぱり、)  
と言いかける、と、目配せをした目が衝つと動いた。少わかいのはま

た颯さつと瞼まぶたを染めたんです。

で、悪い、と知ったから、それつきり、私も何にも言いはしな  
 かった。けれどもどうやらお綾さんが人間らしくなつて来たので、  
 いささか心を安やすんじたは可いいが——寝るとなると、櫛の寢息に、追  
 続いた今の呻うめき吟……

お先達、ここなんです。

二人で心配をしてやろうと言つたは、今だ。疾はやくその遁にげぐち口か  
 ら母屋に抜けよう。が、あるいは三方から引ひ包つんで、誘おびき出す  
 一方口の土間は、さながら窀おとしあな穴あなとも思つたけれども、ままよ、  
 あの二人にならどうともされる！で、浅茅生へドンと下りた、勿

論<sup>はだし</sup>跣足で。

峰も谷も、物<sup>もの</sup>凄<sup>すご</sup>い真夜中ですから、傍<sup>わきめ</sup>目も触<sup>ふ</sup>らないで土間へ

迂<sup>すべ</sup>り込む。

ずつと遙<sup>はるか</sup>な、門<sup>かど</sup>へ近い処に、一間、煤<sup>すす</sup>けた障子に灯<sup>あかり</sup>が射<sup>さ</sup>す。

ねや  
閨<sup>ねや</sup>は……あすこだ。

難<sup>ありがた</sup>有<sup>あ</sup>い、としつとり、びしよ濡れに夜露の染<sup>し</sup>んだ土間を、ぴ

たぴたと踏んで、もつとも向うの灯は届かぬ、手探りですよ。

やがて、その土間の広くなつた処<sup>かか</sup>へ掛<sup>か</sup>ると、朧<sup>おぼろげ</sup>氣に、縁と障

子が、こう、幻のように見えたも道理、外は七月十四日の夜<sup>よ</sup>の月。

で、雨戸が外れたままです。

けれども峰を横倒しに戸口に挿込んだように、靄<sup>もや</sup>の蔓<sup>はびこ</sup>つたのが、

頭かしらを出して、四辺あたりは一面に濛もうもう々々として、霧の海を鴉からすが縫うよう  
 に、処々、松杉の梢こずえがぬつと顛あらかわれた。他ほかは、幅も底も測はかりし知られ  
 ぬ、山の中を、時々すつと火の筋が閃ひらめいて通る……角に松たいまつ明を  
 括くくつた牛かと思う、稲妻ではない、甲かぶとむし虫が月を浴びて飛ぶの  
 か、土地とちのかみ神が蠟燭ろうそく点けて歩ある行くらしい。  
 見ても凄すごい、早やそこへ、と思つて寝衣ねまきの襟かきを搔あわ合あせると、そ  
 の目当ねやの閨ねやで、——確に女の——すすり泣きする声がしました。  
 ……ひそひそと泣いているんですね。」

「夜半に及んで、婦人の閨へ推参で、同じ憚るにしても、黙つて寝ていれば呼べもするし、笑わらいごえ声くみなら与し易いが、泣いてる処じゃ、たとい何でも、迂濶うかつに声も懸けられますまい。

何しろ、泣なきかなし悲なむというは、一通りの事ではない。気にもなるし、案じられもする……また怪しくもあつた。ですから、悪いが、密そつと寄つて、そこで障子の破やぶれめ目から――

その破目が大層で、此方てまえへ閉つてます引手の処なんぞ、棧すそがぶら下つて行抜さがけの風穴かざあなで。二小間青蒼ふたこままつさおに蚊帳すそが漏れて、裾すその紅麻こうあさまで下へ透こいてて、立つと胸まで出そうだから、覗のぞくどころじゃありません。

屈かがんで通抜かけました。そこを除よけて、わざわざ廻まわつて、逆に小

さな破やぶれから透かして見ると……

蚊帳ごし越ですが、向うの壁くつつに附着けた燈あかりと、対向さしむかいでよく分る。

その灯ひを背にして、こちら向きに起返つていたのは、年上の貴

婦人で。蚊帳の萌黄もえぎに色が淡く、有るか無いか分らぬ、長襦袢ながじゆばん

の寝衣ねまきで居た。枕は袖の下に一個ひとつ見えたが、絹よのぶとんの四布蒲団まんを真

中かへ敷いた上に、掛けるものの用意はなく、また寝るつもりも

なかったらしい——貴婦人の膝つづぶに突伏して、こうぐつと腕かいなを掴つかま

つて、しがみついたという体ていで、それで※々《なよなよ》と力な

さそうに背筋くねを曲つて、独鈷とっこいり入はかたの博多しごきの扱帯はかたが、一ツ絡まつわつて、

ずるりと腰すべを這わつた、少い女わかは、帯だけ取つたが、明石あかしの縞しまを着

たままなんです。

泣いているのはそれですね。前刻さつぎから多時しばらくそうやっていたと見えて、ただしくしく泣く。後おくれ毛が揺れるばかり。慰めていそ  
うな貴婦人も、差俯さしうつむ向いて、無言の処で、仔細しさいは知れず……花は  
室なむろが夜風に冷えて、咲凋さきしおれたという風情。

その内に、肩越に抱くようにして投掛なけていた貴婦人の手で脱  
がしたか、自分の手先で払はったか、少わかい女の片肌かみが、ふつくりと  
円く抜けると、麻の目が颯さつと遮さったが、直すぐに底澄そこずんだように白く  
なる……また片一方を脱うすいだんです。脱うすぐと羅うすものの襟えりすじが、肉置ししおきの  
ほどの好いい頸筋えりすじに掛かつて、すつと留とどまったのを、貴婦人の手が  
下へ押下おげると、見る目には苛いじらしゆう、引剥ひっぱぐように思おもわれて、  
裏を返して、はらりと落ちて、腰帯こしおびさがりに飜ひつた。

と見ると、蒼白く透つた、その背筋を振つて、貴婦人の膝へ伸し上りざまに、半月形の乳房をなぞえに、脇腹を反らしながら、ぐいと上げた手を、貴婦人の頸へ巻いて、その肩へ顔を附ける：

：

その半裸体の脇の下から、乳房を斜に掛けて、やア、抉つた、突いた、血が流れる、炎が閃めいて燃えつくかと思う、洪と迸つたような真赤な痣があるんです。」

山伏は大息ついて聞くのである。

「その痣を、貴婦人が細い指で、柔かにそろそろと撫でましたっけ。それさえ気味が悪いのに、十度ばかり擦つておいて、何を何と、少い女の耳許から潜らして、あの鼻筋の通つた、愛

まるまげ  
円鬚  
あいきよ



嬌うのない 細ほそ面おもての緊しまった口で、その痣あざを、チュツと吸う、

「うーむ、」

と山伏は呻うな吟なった。

「私は生血を吸うのだと震え上あがった。トどうかは知らんが、少わかい女の絡からんだ腕は、ひとりで貴婦人の頸うなじを解けて、ぐたりと仰向あおむけに寝ましたがね、鳩尾みずおちの下にも一ヶ所、めらめらと炎の痣。

やがて、むっくりと起上あって、身を翻ひした半身雪の、棲つまを乱して、手をつくくと、袖さそが下さって、裳もすそを捌さいて、四ツ這ばいになった、背中にも一ツ、赤斑あかまだらのある……その姿は……何とも言えぬ、

女の狗いぬ。」

「ああ！」

「驚く拍子に、私が物音を立てたらしい。貴婦人が、衝と立つと、蚊帳越にパツと燈を……少い女は這つたままで搔消すよう——よく一息に、ああ消えたと思う。貴婦人の背の高かつたこと、蚊帳の天井から真白な顔が突抜けて出たようで——いまだに気味の悪さが倂立ってちらちらします。」

あとは、真暗、蚊帳は漆のようになった。」

## 三十二

「何が何でも、そこに立つちやいられんから、這つたか、摺つたか、弁別はない、凸凹の土間をよろよろで別亭の方へ引返す

と……

また、まあどうです。

あの、雨戸がはずれて、月明りが靄もやながら射さ込んでいる、折曲さしこった縁側は、横縦にがやがやと人影が映つて、さながら、以前、この立場たてばが繁はん昌しょうした、午飯頃ひるめしごろの光景ありさまではありませんか。入乱れて皆腰を掛けてる。

私は構わず、その前を切つて抜けようと思いました。

大胆だと思えますか——何な、あ、そうではない。度胸も信仰も有るのではありません、がすべてこういう場合に処する奥の手が私にある。それは、何です、剣術の先生は足が顫ふるえて立たち縮すくんだが、座頭の坊は琵琶びわを背負しよつたなり四よつんば這はいになつて木曾の棧かけはしをすら

すら渡り越したという、それと一般ひとつ。

希代な事には、わざと胸に手を置いて寝て可おそろし恐い夢を平気で  
見ます。勿論夢と知りつつ慰みに試みるんです。が、夢にもしろ、  
いかにも堪たまらなくなると、やと叫んで匆はねお起きる、冷汗は浴あびるばか  
り、動悸どうきは波を立てていても、ちつとも身体からだに別条はない。

これです！

いざとなれば匆はす起きよう、夢でなくつて、こんな事があるべき  
筈はずのもんじゃない、と断念あきらめは附あけましたが。

突つつかか懸り、端やっに居た奴は、くたびれた麦藁帽むぎわらぼうを仰のけぎまに被かぶつ  
て、頸ぼんのくぼ窪くぼへ摺ずり落ちそうに天井を睨にらんで、握にぎりこぶし拳こぶしをぬつと  
上げた、脚絆きやはんがけの旅商人たびあきんどらしい風でしたが、大欠伸おおあくびをし

ているのか、と見ると、違った！ 空を掴んで苦しんでるので、  
 咽喉から垂々と血が流れる。

その隣座に、どたりと真俯向けになった、百姓体の親仁は、  
 抜衣紋の背中に、薬研形の穴がある。

で、ウンウン呻吟く。

少し離れて、青い洋服を着た少年の、二十ばかりで、学生風  
 が、頻りに紐のようなものを持って腰の廻りを巻いてるから、帯  
 でもするかと見ると、振ら下った腸で、切裂かれ臍の下へ、押込  
 もうとする、だくだく流れる血の中で、一掴、ずるりと詰め  
 たが、ヒイツと悲鳴で仰向けに土間に転がり落ちると、その下に  
 なって、ぐしやりと圧拉げたように、膝を頭の上へ立てて、蠢め

いた頤髯あごひげのある立派な紳士は、附元つけもとから引断ひききれて片足ない、  
 まるで不具かたわの蟋蟀きりぎりす。

もう、一面に算を乱して、溝泥どぶどろを擲たたきつ附たつきつけたような血のりの中に、  
 伸びたり、縮んだり、転がったり、何十人だか数が分りません。

いつの間にか、障子が透すけて、広い部屋の中も同断です。中に  
 も目に着いたのは、一面の壁の隅に、朦朧もうろうと灰色の礫はりつけばしら柱つりさ  
 が露あらわれて、アノ胸つきそを突反つぎそらして、胸を橋に、両手を開いて釣つりさ  
 下がったのは、よくある基督キリストの体ていだ。

床柱とこばしらと思う正面には、広い額の真中まんなかへ、五寸釘が突刺さつて、  
 手足も顔も真蒼まつさおに黄色い眼まなこを赫かつと睜みひらく、この俤おもかげは、話にある幽ゆ

うれいぶね ふなおさ  
 霊船の船長にそつくり。

おおまないた  
 大俎がある、白刃しらはが光る、筏いかだのように檜やりを組んで、まるで地獄の雛壇ひなだんです。

どれも抱着だきつきもせず、足へも縫すがらぬ。絶叫して目を覚ます……  
 まだそれにも及ぶまい、と見い見い後退あとじさりになつて、ドンと突当  
 つたまま、蹠よろ躑よろけなりに投出されたように浅茅生あさちうへ出た。

(はああ。)

と息を引いた、てのひら あぶら掌へ、脂のごとく、しかも冷い汗が、総身そうみを絞  
 って颯さつと来た。

例の草清水くさしみずがありましよう。

日につしよく蝕くの時のような、草の斑まだらに黒い、朦もうとした月明りに、そ

ここに蹲しゃがんだ男がある。大形の浴衣の諸膚脱もろはだぬぎで、毛だらけの脇を上げざまに、晩方、貴婦人がそこへ投ほうつた、絹の手巾ハンケチを引伸ひんのしながら、ぐいぐいと背中を拭ふいている。

これは人間らしいと、一足寄つて、

(君……)

と掠かすれた声を掛けると、驚いた風にぬつくりと立つたが、瓶かめのようで、胴どうなか中ばかり。

(首はないが交際つきあうけえ。)

と、野太い声で怒鳴どなられたので、はつと思うと、私も仰向あおむけに倒れたんです。

やがて、気のついた時は、少わかい人の膝枕で、貴婦人が私の胸を



撫でていました。」

三十三

「お先達、そこで二人して交かわるがわる話しました。——峠の一軒家を買取ったのは、貴婦人なんです。

これは当時石川県のある顯けん官かんの令夫人、以前は某なにがしと云う一時富山の裁判長だった人の令嬢で、その頃この峠を越えて金沢へ出て、女学校に通っていたのが、お綾と云う、ある蔭まきえし絵師の娘と一つ学校で、姉妹のように仲が好よかつたんだそうです。

対さき手は懺悔ざんげをしたんですが、身分を思うから名は言いますまい。

……貴婦人は十八九で、もう六七人情じょうじん人ひとがありました。多情な女で、文ばかり通わしているのや、目顔で知らせ合っただけなのなんぞ——その容きりよう色いろでしかも妙としごろ齡ね、自分でも美しいのを信じただけ、一度擦すれちが違ちがったものでも直ぐに我を恋うると極きめていたの——胸に描いたのは幾人だか分らなかつた。

罪むくいの報むくいか。男どもが、貴婦人の胸の中で掴つかみ合あいをはじめた。

野郎が恐らくこのくらい気の利かない話はない。惚ほれた女の腹の中で、じたばたでんぐり返しを打って騒さわぐ、噛かみ合あう、掴つかみ合あう、引搔ひっかき合あう。

この騒さわぎがひとかたまり一いつ団だんの仏掌つくねいも諸ものような悪あく玉たまになつて、下腹から鳩尾みずおちへ突上げるので、うむと云つて齒くいしばを喰く切きつて、のけ

ぞるといふ奇病にかかった。

はじめの内は、一日に、一度二度ぐらいつつで留とまつたのが、次第に嵩こそうじて、十回以上、手足をぶるぶると震わして、人事不省で、烈はげしい瘵けいれん癩いれんを起す容体だけれども、どこもちつとも痛むんじやない。——ただ夢中になつて反つちまつて、白い胸を開けて見ると、肉へ響いて、団かたまりが動いたと言います。

三度五度は訳も解らず、宿のものが回生きつけ剤だ、水だ、で介抱して、それでまた開きも着いたが、日一日数は重なる。段々開きが遅くなつて、激はげしい時は、半時も夢中で居る。夢中で居ながら、あれ、誰たが来て怨うらむ、彼かが来て責める、咽喉のどを緊しめる、指を折る、足を捻ねじる、苦しい、と七転八倒。

情人が押懸けるんです。自分で口走るので、さては、と皆頷みんあなずいた。

浅ましいの何のじやない。が、女中を二人連れて看病に駆着けて来た母親は、娘が不行為ふしだらとは考えない。男に膚はだを許さないのを、恋するものが怨むためだ、と思つたそうです。

とても宿じや、手が届かんで、県の病院へ入れる事になると、医者せんせい達は皆頭こうべを捻ひねつた。病体少しも分らず、でただまあ応急手当に、例の仰反のげぞつた時は、薬を嗅かがせて正氣づかせる外はないのです。

ざつと一月半入院したが、病勢は日に日に募つる。しかも力が強くなつて、伸しかかつて胸おきを圧える看護婦に助手なんぞ、一所に

両方へ投飛ばす、まるで狂人<sup>きちがい</sup>。

そうかと思うと、食べるものも尋常だし、気さえ注<sup>つ</sup>けば、間違  
った口一つ利かない。天人のような令嬢<sup>れいじやう</sup>なんで、始末に困った。

すると、もう一人の少い<sup>わか</sup>方です。——お綾はその通りの仲だか  
ら、はじめから姉<sup>あね</sup>が病気のように心配をして、見舞にも行<sup>ゆ</sup>けば看  
病もしたが、暑中休暇になつたので、ほとんど病院で附切り同様。

妙な事には、この人が手を懸けると、直ぐに胸が柔かになる。  
開きは着かぬまでも三人四人で圧<sup>おさ</sup>え切れぬのが、静<sup>しずか</sup>に納<sup>おさ</sup>まって、  
夢中でただ譫<sup>うわごと</sup>事を云うくらいに過ぎぬ。

で、母親が、親にも頼んで、夜も詰め切ってもらつたそうで。  
肥満<sup>ふとつちよ</sup>女の女中などは、失礼無<sup>ぶしつけ</sup>駄<sup>だ</sup>構<sup>かま</sup>つちやいられん。膚<sup>はだぬぎ</sup>脱<sup>だ</sup>の

大汗を掻いて冬とうがん瓜の膝で乗上つても、その胸の悪玉に突つッ離ばなされて、素すてん転ころりと倒れる。

(お綾様。お綾様。)

と夜が夜中よなか、看病疲れにすやすやと寝ているのを起すと、訳はない、ちよいと手を載せて、

(おや、また来ているよ。……)

誰たれ某それだね……という工く合あいで、その時々ようだんの男の名を覚えて、串じ戲ぎのように言うと、病人が

(ああ、)

と言つて、胸の落着く処を、

(煩うるさい人だよ。お帰り。)

で、すつと撫で下ろす。」――

### 三十四

「すると、取憑とついた男どもが、眉間尺みけんじやくのように噛合かみあつたまま、出まいとして、乳ちの下を潜くぐつて転げる、其奴そいつを追つ懸け追つ懸け、お綾さすが擦さすると、腕うでへ込すべつて、舞戻まつて、鳩尾みずおちをビクリと下つて、膝ひざをかけて畝うねる頃には、はじめ鞠まりほどののが、段々小さく、豆位まめになつて、足の甲を蠢うごめいて、ふつと拇指おやゆびの爪から抜ける。その時分には、もう芥子粒けしつぶだけもないのです、お綾さんの爪にも堪たまらず、消滅する。

トはつと氣を返して、恍惚目を開く。夢が覚めたように、起上つて、取亂した態もそのまま、婦同士、お綾の膝に乗掛つて、頸に手を擲みながら、切ない息の下で、

(濟まないわね。)

と言うのが、ほとんど例になつていたそうです。——お綾が、よく病人の氣を知つた事は、一日も痙攣が起つて、人事不省なのを介抱していると、病人が、例に因つて、

(来たよ。)

と呻吟く。

(……でしようね、)

と親類内の従兄とかで、これも關係のあつた、——少年の名を



お綾が云うと……

(ああ、青い幽霊、)

と夢中で言つた——処へひよっこり廊下から……脱いだ帽子を手に提げて、夏服の青いので生なましろ白しろい顔を出したのは、その少年で。出であいがしら会頭に聞かされたので、真まっか赤かになつて逃げたと言います。その癖お綾は一度も逢つた事はないのだそうで。

さあへ医師いしやは止よしても、お綾は病人から手離なせますまい。

いつまで入院いったんをしていても、ちつとも快いいほう方ほうに向われないから、  
一 且内いったんへ引取つて、静かに保養をしようという事になつた時、

貴婦人の母親は、涙でお綾の親達に頼んだんです。

頼まれては否いやと言わぬ、職人氣質かたぎで引受けたでしょう。

途中の、不意の用心に、男が二人、母親と、女中と、今の二人の婦人おんなで、五台、人力車を聯つらねて、俱利伽羅峠を越したのは、——ちようど十年前ぜんになる——

同じ立場たてばで、車をがらがらと引込んで休んだのは、やっぱり、今残る、あの、一軒家。しかも車から出る、と痙攣ひきつけて、大勢に抱え込まれて、お綾の膝に抱かれた処は。……

(先刻、貴下あなたが、怪い姿あやしで抱合っている処を蚊帳越に御覧なすつた、母屋の、あの座敷です。)

ツて貴婦人が言いましたつけ。

お先達。」

三造は酔えるがごとき対手あいてを呼んで、

「その時、私は更あらためて、二人の婦人にこう言いました。

（時が時、折が折なんですから、実は何にも言出しはしませんでしたが、その日、広土間の縁の出張でばりに一人腰を掛けて、力ちからも餅ちを食べていた、鳥打帽を冠かぶって、久留米の絣かすりを着た学生がありました。お心は着かなかつたでしょうが、……それは私です。

……

そして、その時の絵のような美しさが、可懐なつかしさの余り、今度この山越やまごえを思い立って参ったんです。）

お先達、事実なんです。」

と三造は言った。

「これを聞いて少いわか女ひとが、

(そして貴下が、私を御覧なさいましたのは、その時が初めてですか、)

(いいえ、)

と私が直ぐに答えた。

(違いかどうか分かりませんが、その以前に二度あります。……一度は金沢の藪やぶの内と言う処——城の大手前と対むかい合つた、土塀の裏を、鍵かぎの手形てなり。名の通りで、竹藪の中を石垣に従ついて曲る小路こうじ。家も何にもない処で、狐がどうの、狸がどうの、と沙汰さたをして誰も通らない路みち、何に誘われたか一人で歩ある行いた。……その時、曲まがりかど角かどで顔を見ました。春の真昼間まっぴるま、暖い霞のような白い路が、藪の下を一條ひとすじに貫いた、二三間前さんまへを、一人通つた娘があります。

衣服きものは分らず、何の織物か知りませんが、帯は緋色ひいろをしていたのを覚えていゝる。そして結目むすびめが腰へ少し長目でした。ふらふらとつゝいて見送つて行く内ゆに、また曲角で、それなり分らなくなつたんです。）

——二人は顔を見合せました。」

### 三十五

「私はまた……」

（もう一度は、その翌年、やつぱり春の、正午ひる少し後さがつた頃、公園の見晴しで、花の中から町中まちなかの桜を視ながめていると、向うが山

で、居る処が高台の、両方から、谷のような、一ヶ所空の寂しい  
さむらいまち  
士町 と思う所の、物干ものほしの上にあがって、霞を眺めるらしい  
立姿の女が見えた。それがどうも同じ女らしい。口八台を立って、  
柳の下から乗り出して、熟じつと瞻みまもる内に、花吹雪がはらはらとして、  
それつきり影も見えなくなる、と物干ものほしの在所ありかも町の見当も分らな  
くなくなってしまった。……が、忘れられん、朧おぼろ夜にはそこぞと思  
う小路々々を徜徉さまよい徜徉さまよい日を重ねて、青葉に移るのが、酔のさ  
め際のように心寂しくってならなかった——人は二度とも、美し  
い通魔とおりまを見たんだ、と言う……私もあるいはそうかと思つた。）  
貴婦人が聞澄まして、

（二度目のは引越した処でしょう！）

と少<sup>わか</sup>い人に言うんです。

（物干で、花見をしたり、藪<sup>やぶ</sup>の中を歩<sup>ある</sup>行いたり、やつぱり、皆<sup>みんな</sup>こ  
ういう身体<sup>からだ</sup>になる前兆でしょう。よく貴<sup>あなた</sup>下、お胸に留めて下さい  
ました。姉さん、私もう一度緋色の帯がしめたいわ。）  
と、はらはらと落涙して、

（お恥かしいが……）

——と続いて話した。——

で、途中介抱しながら、富山へ行つて、その裁判長の家に着  
く。医者では不可<sup>い</sup>か、加持<sup>かじき</sup>祈<sup>とう</sup>と、父親の方から我<sup>が</sup>を折つてお札  
お水、護摩となると、元々そういう容体ですから、少しずつ治ま  
つて、瘵<sup>けいれん</sup>攣<sup>れん</sup>も一日に二三度、それも大抵時刻<sup>きま</sup>が極つて、途中不

意に卒倒するような憂慮きづかいなし、二人で散歩などが出来るようになったそうです。

あるひ 一日、はたんきよう 巴旦杏の實の青々した二階の窓際で、涼しそうに、うとうと、一人が寝ると、一人も眠った。貴婦人は神通川の方を裾かたで、お綾の方は立山の方を枕ひじまくらで、互違いに、つい肱ひじまくら枕ひじまくらをしたんですね。

トントンあしおとトントン 躑あしおと音がして、二階の梯子はしごだん段から顔を出した男がある。

お綾が起返ると、いつも病人が夢中で名を呼ぶ……内証では、その惚話のろけを言う、何とか云う男なんです。

ズツと来て、裾から貴婦人の足をおき圧えようとするから、ええ、



不躑ぶしつな、姉あねを悩なやす、病やまいの鬼おにと、床とこの間に、重代こがねの黄金こがねづくりの  
 長船おさふねが、邪氣まじを払はらうといつて飾かざつてあつたのを、抜ぬく手ても見みせ  
 ず、颯さつと真額まびたいへ斬きり付つける。天窓あたまがはつと二ふたつに分わかれた、西瓜すいかを  
 さつくり切きつたよう。

処ところへ、背後うしろの窓下まどしたの屋根やねを踏ふんで、窓まどから顔かほを出だした奴やつがある、  
 一目ひとめ見るや、膝ひざを返かへしざまに見み当あもつけず片手ひとてなぐりに斬き払はらつて、  
 其奴そいつの片腕ひとでしをばさりと落おした。時ときに、巴旦杏ばだんじやうの樹きへ樹上きのぼりをして、  
 足あしを踏張ふんばつて透見すきみをしていたのは、青い洋服やうふくの少年せうねんです。

お綾あやが、つかつかと屋根やねへ出でて、狼狽うろたえてその少年せうねんの下したりる処ところ  
 を、ぐいと突貫つといたが、下腹したはらで、ずるり腸はらわたが枝えだにかかつて、主しゅは  
 血ちみどれ、どしんと落おちた。

この光景ありさまに、驚いたか、湯殿口に立った髯面ひげづらの紳士が、紹ろ羽織ぼおりの裾すそを煽あおつて、庭を切つて遁にげるのに心着こころいて、屋根から翻ひらり然ら…と飛んだと言います。垣を越える、町を突切つつきる、川を走る、やがて、山の腹へ抱だきついて、のそのそ這はい上あるのを、追お継いりさまに、尻を下から白刃しらはで縫ぬ上げる。

ト頂たかに一人立ひとたつて、こつちへ指さしをして笑わらつたものがある。工工くく、と剣つるぎを取とつて飛とばすと、胸元へ刺さつて、ぼつたり、と朽く木倒きだおれ。

するする攀よじ上のぼつて、長船ながぶねのキラリとするのを死骸しがいから抜取ぬくと、垂たらたら湧わく血ち雫しずくを逆手さかたに除とり、山の端はに腰こしを掛かけたが、はじめて吻ほっと一息ひといきつく。——瞰みおろ下ふもとす麓たかの路みちへ集たつて、頭あたまばかり、

うようよして八九人、得物を持って押寄せた。

猶ためら予わず、すらりと立つ、裳もすそが宙に蹴出けだしを搦からんで、踵かかとが腰あがに上ると同時に、ふつと他愛なく軽々と、風を泳いで下りるが早いか、裾がまだ地に着かぬ前に、提さきげた刃ひっさの下やいばに、一人が帽子から左右へ裂けた。

一同が、わつと遁にげる。……」

### 三十六

「今はもう追うにも及ばず、するすると後あとを歩ある行きながら、刃やいばを振あつて、

(は、)

と声懸けると、声に応じて、一人ずつ、どたり、どたりで、算を乱した、……生木の枝の死骸ばかり。

いつの間にか、二階へ戻った。

時に、大形の浴衣の諸膚脱ぎで、投出した、白い手の貴婦人の二の腕へ、しつくり喰ついた若いもの、かねて聞いた、——これはその人の下宿へ出入りの八百屋だそうで、やっぱり情人の一人なんです。

(推参。)

か何かの片手なぐりが、見事に首をころりと落す。拳の冴に、白刃の尖が姉の腕を掠つて、カチリと鳴った。

あつと云うと、二人とも目を覚めた。

お綾の手に、抜いた刀はなかつたが、貴婦人は二の腕にはめたまもりぶくろ守護袋の黄色きんの金具をおさ圧えていたつていう事です。

実は、同じ夢を見たんだそうで、もつとも二階から顔を出したのも、窓から覗のぞいたのも、樹上りをしたのも、皆みんな同時に貴婦人は知っていた。

自分の情人を、一人々々妹が斬殺すんで、はらはらするが、手足は動かず、声も出せない。その疲れた身体からだで、最後に八百屋の若いものに悩まされた処——片腕一所に斬られた、と思つたが、守護袋で留まつたと言う。

貴婦人の病気は、それで、快癒かいゆ。

が、入いれかわ交わつて、お綾は今の身になった。

と言うのは、夢中ながら、男を斬つた心持が、骨こつずい髓いに徹して忘れられん。……思い出すと、何とも言えず、肉が動く、血ちしお汐おが湧わく、筋が離れる。

他ほかの事は考えられず、何事も手に着かない、で、三度の食ほしも欲ほくなくなる。

ところが、親がまきえしよく蒔ま絵え職しよく。小児こどもの時から見習いで絵心があつたので、ノオトブツクへ鉛筆で、まず、その最初の眉みけんわり間わり割わりを描かいたのがはじまりで。

顔だけでは、飽あきた足たらず、線香のような手足を描いて、で、のけぞらした形へ、疵きずをつける。それも墨だけでは心ゆかず、やがて

絵の具をつかい出した。

けれども、男の膚はだは知らない処女の、艶書ふみを書くより恥かしく  
 って、人目を避くる苦勞やに瘦せたが、病やまいは嵩こじて、夜も昼もぼん  
 やりして来た。

貴婦人も、それつきり学校はやめたが、お綾も同断。その代り  
 寂さびしい途中、立向うても見送つても、その男を目に留めて、これを  
 絵姿にして、斬る、突く、胸を刺す。……血を彩つて、日を経ふる  
 と、きつとそのものは生命いのちがないというのが知れる……段々嵩じ  
 て、行違ちがいなりにも、ハツと気合を入れると、即座ぶつたおに打倒ぶれる  
 人さえ出来た。

が、可おそろし恐おそろしいのは、一あるよ夜あるよ、夜中に、ある男を呪のろつていと、

ばたりと落ちて、脇腹から、鳩尾みずおちの下、背中と、浴衣越しに、  
——それから男に血を彩ろうという——紅べにの絵の具皿こぼの覆れかか  
つたのが、我が身の皮を染め、肉を透して、血に交つて、洗つて  
も、拭ぬぐつても、濃くなるばかりで、褪あせさせぬ。

お綾は貴婦人の膝すかに縋すがつて、すべてを打明けて泣いたんです。

その頃は、もう生れかわつたようになって、何なに某がしの令夫人だ  
つた貴婦人は、我が身おんなも同じおんなに、悲かなみ傷いたんで、何おは措おいても、そ  
の悪い癖たを撓ため直たそうと、千辛せん万苦しんぼんくしたけれども、お綾は、怪あやし  
い情あやしを制し得ない。

情を知つた貴婦人は、それから心着いて試みると、お綾に呪のろ  
われたものは、必ず無事ではないのが確たしかで。



今はこう、とお綾の決心を聞いた上、心一つで計らつて、姫捨山を見立てました。

ところが、この俱利伽羅峠は、夢に山の端はに白刃しらばを拭ぬぐつて憩つた、まさしくその山の姿だと言う。しかしこの峠を越したのが、少わかい人には、はじめて国の境を出たので、その思出もあつたからでしょう。

ちようど、立場たてばが荒廃すたれて、一軒家が焼残つたというのも奇蹟だからと、そこで貴婦人が買取つて、少わかい女ひとの世を避ける隠れ里にしたのだと言います。

で、一切すべての事は、秘密に貴婦人が取とりまかなう。」

## 三十七

「月に一度、あるいは二度、貴婦人が忍んで山に上つて来る。その時は、ああして抱いて、もとは自分から起つた事と、膚はだの曇くもりに接吻キッスをする。

が、雪なす膚に、燃え立つ鬼百合の花は、吸消されもせず、しぼみもしない。のみならず、会心の男が出来て、これはと思つてその胸へ、グザと刃やいばを描いて刺す時、膚を当てると、鮮からくれない紅の露を絞つて、生血いきちの雫しずくが滴点したたると言います。

広間の壁には、竹たけ篋べらで土を削つて、基督キリストの像が、等身に刻みつけて描かいてあつた。本箱の中も、残らず惨憺さんたんたる彩色さいしき画

で、これは目当の男のない時、歴史に血を流した人を描くのでした。」

と物語る、三造の声は震えた。……

「お先達。

で、貴婦人は、

(縁のある貴下。あなた……ここに居て、打ちもし、蹴りもし、縛りも

して、悪い癖を治して上げて下さい。)

と言う。

若い人は、

(おなつかしい方だけに、こんな魔所には留められません、身体からだの斑ふちが消えないでは。)

と、しつかり袂たもとに縋すがつて泣きます。

私は、死ぬ決心をするほど迷った。

果しなく猶ためら予らつているのを見て、大方、それまでに話した様子

で、後で呪のろ詛まじわれるのを恐れるために、立て得ないんだと思つた

らしい。

沓くつぬぎ脱ぬをつかつかと、真白い跣はだし足あしで背戸へ出ると、母屋の羽目

を、軒へ掛けて、森のように搦からんだ鳥からすうり 瓜うりの蔓つるを手繰たぐつて、一ひ

束とつかねずると引きながら、浅茅生あさぢうの露つゆに膝ひざを埋うづめて、背せなから

袖そでをぐるぐると、我手わがてで巻くので、花は雪のように降りかかった。

旭あさひがあ出でました。

驚きく私わたしを屹きつと見て

(誓は違えぬ！ 貴下が去つて、他の犠牲の——巢にかかるまで、このままここで動きはしない、)

心安く下山せよ。

(さあ、)

と言うと、一目凝と見た目を瞑つて、黒髪をさげて俯向いたんです。

顔を背けて、我にもあらず、縁に腰を落した内に、貴婦人が草鞋を結んだ。

堪らなくなつて、飛出して、蔓を解こうと手を懸ける。胸を引いて頭を掉るから、葉を引撈つて、私は涙を落しました。

(私なんざ構わんから。)

(いいえ、こうしてまで誓を立てぬと、私は貴下を殺すことを、自分でも制し切れない。一夜冥土へ留めました。お生きなさいまし、あらたなが新にお存らえ遊ばせ。)

と、目を潤うるましたが凜々りりしく云う。

(たとい、しばらくの辛抱でも。男を呪のろう気のないのは、お綾さんにも幸しあわせ福です。そうしておおきなさいまし。)

と、貴婦人が、金剛杖も一所に渡した。

膝さがりに荷を下げて、杖を抱いてしよんぼり立つのを……

(さようなら、御機嫌よう。)

(はっ、)

と言って土間へ出たが、振返ると、若い女ひとは泣いていました。

露が閃めく葉を分けて、明石に透いた素膚を焼くか、と鬼百合が  
 赫と紅い。

その時、峰はずれに、火の矢のように、颯と太陽の光が射した。  
 貴婦人が袖を翳して、若い女を庇いました。……

あの、鬼の面は、昨夜、貴下を罵るトタンに、婦を驚かすまい  
 と思つて、夢中で投げたが——驚いたんです、猿ヶ馬場を出はず  
 れる峠の下り口。谷へ出た松の枝に、まるで、一軒家の背戸のそ  
 の二人を睨むよう、潤と眼を睜いて、紫の緒で、真面に引掛つて  
 いたのです。……

お先達、私はどうしたら可いでしょう。」  
 と溜息を一度に吐く——

「ふう、」

と一時いつときに返事をして、ややあつて、

「鬼神に横道はござらんな。」

と山伏も目を瞬しばたいた。

で、そのまま誓を立てさせては、今時誰も通らぬ山路、半日はよし、一日はよし、三日と経たたぬに、飢うえもしよう、渴うえきもしよう、炎天さくらに曝さらされよう。が、旅人があつて、幸さいわいに通するとすると、それは直ちに犠牲にえになる。自分はよくても、身代りを人にさせる道でない。

心を山伏に語ると、先達こぶしも拳を握にぎつて、不束ふつつかながら身命に賭けて諸共もろともにその美女たおやめを説といて、悪あしき心を翻ひえさせよう。いざ



うれ、と清水を浴びる。境も嗽手水うがいちようずして、明王の前に額着ぬかづいで、やがて、相並んで、日を正射まともに、白い、眩まばゆい、峠を望んで進んだ。

雲から吐出されたもののように、坂に突伏つつぶした旅人りよじんが一人。

ああ、犠牲にえは代った。

扶たすけ起こすと、心なき旅人たびびとかな。朝がけに禁制の峠を越したの

であつた。峠では何事もなかつたが、坂で、躓つまずいて転んだはずみに、あれと喚わめく。膝から股またへ真白まっしろな通草あけびのよう、さくり切れたは、俗に鎌かまいたち鼬かが抓つかけたと言う。間々ある事とか。

先達が担いで引返ひっかえした。

石動の町の医師を託ことづかりながら、三造は、見返りがちに、今は

蔓<sup>つる</sup>草<sup>くさ</sup>の絆<sup>きず</sup>も断<sup>た</sup>つたろう……その美<sup>た</sup>女<sup>おやめ</sup>の、山<sup>ふも</sup>の麓<sup>もと</sup>を辿<sup>たど</sup>つたので  
ある。

明治四十一年（一九〇八）年十一月

# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成5」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年2月22日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十一卷」岩波書店

1941（昭和16）年8月15日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2007年7月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 星女郎

## 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>